躾方武士鑑

躾方武士鑑

座本竹田榮藏

詞ヲツトとらまへた。サア酒々と主從が。地うてんつ亭主走り出。詞よいよ〳〵。出來ました左平太樣。イヤ又伴內樣の辨當持。壬生の囃子の身ぶりのよさ。どうも言ぬと譽そやせば。地高の左平太機嫌能。詞ナント。きつい物で有ふがな。今日の趣向は伴內が思ひ付。此桐が谷の花盛りで。壬生狂言とは出來したと。地褒美の詞頭に乘て。詞イヤ又遊び一通りは我等が得物。狂言は取分て。鷺端の傳授受た故。それで苗字は鷺坂伴內。地且那のお敵我等が君も間夫をきるのが花盜人。必そふは成ぬぞと。ツイいふ事も邪顏。玉琴太夫にくて口。詞ヲヽすかん。土氣の放れぬ伴內主。お客大事は廓の例。間夫をきるのは勤の樂しみ。緣の有のが誠じやナア。若浦主。サイナア何ぼ可愛らしい男でも。口であいその盡るも有。又見かけはどふやらこわい顏でも。心いきの可愛らしいお方と思へば。それこそは眞實に。誠を通すが勤の意氣路。伴內主。そふ思ふて下さんせと。地喰れ拔たる伴內が。しよげた惡身は鰕踏。鷺坂とこそ ヲシ見へにけり。地左平太は不興顏。詞云れぬ事を言出して。どふやら此座がしらけて來たはい。コレ太夫。必氣にさへぬがよいぞやと。地延た鼻毛を折わげる。亭主嘉六が浮出し。サア是からわつさり御酒車。長柄は恐れ上ませふと。口合廻る盃に。嘉六禿が時花歌。歌桃の花咲彩色姿。女雛男雛の酒もりに。姉樣ちよつと相生の松と。契りを這子雛。氣を立雛の嫁入道具。可愛らしいじやないかいな。キヨン。キヨキヨ。キヨ〳〵キヨン。キヨキヨ。キヨキヨきよんきよろりとさ。どふした〳〵。忍ぶ戀にはお月樣じやまよ。人目忍ぶの頰かむり。格子にちよつと相言の待身に成しほつとげに。腹立文も癇癪道具。あほうらしいじやないかいな。キヨンキヨ〳〵キヨ〳〵キヨン。キ

ヨキヨ。キヨ〳〵きよんきよろりとさどふした〳〵と。諷ひフシ嚙く其中へ。地山路の花に。名にしおふ。桃の井若狭之助安近。長上下の折目高麓に家來をとゝめ置。奴僕召連しづ〳〵と幕のフシ元へぞ歩み來る。地左平太見るより。詞ヤレ待兼し桃井殿。サ、、、いざ先是へ〳〵。サア先以今日は。お心付の御饗應。近比祝着に存ると。地云に伴内威義繕ひ。詞拙者迄も好物の色能御馳走。イヤ最千萬忝しと。地禮義を述れば若狭之助。詞是は〳〵痛み入たる御一禮。此度某院使御饗應の役目相勤る故。貴公の御親父師直公の。お差圖を以。首尾能役義勤る樣に御引廻しをお頼申せば。貴殿迎も同じ重んじ。兼て夫成大磯の遊君に。馴染ある事聞及び。何がな御馳走と存じ。呼寄し身が趣向。御心に叶ひ先は大慶。猶此上は師直公へ。宜しくも御執成。地頼み上ると役目をば。重く守りて方便の術を行ふ桃井が。ほぞに容る機嫌顔。詞何さ〳〵。貴殿の樣な細心の付た。粋なお人が有ふかいの。エヽ親共へは毎度お心付。イヤモウモウモウ。親共も貴殿には腰を拔しておるてや。コレサ〳〵氣遣ひ召るゝな。饗應の役目大極上々の首尾にさせいて何とせふぞいの。ハヽ、、、ヤ其事は打やつて。今日は緩りとお氣晴し。併其かたくろしい上下。太夫共がアレ〳〵。彼樣に氣の毒顔。サ、お脫成され。イザ〳〵。地と云を押とめ。詞ハイヤ〳〵若狭之助も竹木成ねば。色塚の傳授も申受たけれ共。不滑の某却て不興。殊更明日饗應の手都合萬端猶又吟味仕申付る用事も有ば。ぶ躾ながら是にてお暇。イヤ何お傾城達。隨分御機嫌頼入。アイ〳〵そんならお歸り遊ばすかへ。どふぞ緩々御見もじ。イヤ申近日我等へ。ヘ、御來臨と。地亭主が挨拶左平太伴内。詞然らばおさらば。地お暇と詞の花や桃井は。家來フシ引連立歸る。詞テモ堅い樣で粹なお方。能男じやないかいな。サイナわしも早ふ仕立てもらひ。私がお客はアノお方。コレそふ思ふておくれへと。地ませるを左平太打笑ひ。詞ヲヽ其時橋渡しは身共がする。何と。コリヤ嬉しいか。ア、いやお旦那は橋渡し。我等はそちを船渡し。水揚の鹽梅よし。コリヤどふじや〳〵。エヽ何云じややら。お前に抱れて寢樣よりコリヤ牛は古いぞ。イヽエ雷に摑れたがましじやわいなと。地ずつけり云ふも時の興笑ひ催す折柄に。地春の日

脚も長の旅心いきせき早野勘平。家來がかづく挾箱用意もさつぱり麻上下。しやんと着こなし大小も。遺鹽冶の家臣とは。骨柄にこそ フシ見へにけり。詞コリヤ／／奴あれなる幕は左平太殿の御幕なるか尋て參れ。ナイ／／／と。地奴等さ。幕近く走り寄。詞卒爾ながら此御幕は。高の左平太樣のお幕でござりますかなと　地藪からぼつと剃さげ奴。伴内が聞とがめ。詞成程左平太樣のお幕成が。見馴ぬ下郎何者成ぞ。ナイ／／内分承つて參れと有主人の云付。地暫らくお待下さるべいと云捨て引返し。斯と告れば勘平は。幕のこなたに威義を正し。詞拙者は伯州鹽冶判官が家來。早野勘平と申者。ム、鹽冶の家來早野勘平聞及ぶ。用事有ば屋敷へは參るべきに遊興の此場所へ。地近比不禮とねぢ上聲。それと悟つて猶敬ひ。詞ハ只今お家敷へ參りし所。師直公には早御登城。左平太樣には此所へ。御遊參と承はり。直にお願ひ申さん爲。直樣參上仕る。不禮の段は眞平御免下さるべし。主人判官此度勅使饗應の役目を蒙る家の面目。併高家の職。萬端御差圖は。師直公と承はる。不骨の主人判官なれば。何角不都合御引廻しを願ふ爲。國家老大星由良之助申付。拙者遙々罷下り只今當着仕る。何卒此度の役目。判官首尾能相務る樣。御執成賴み上ると。地何か白木の菓子箱取出し。詞此一折は麁末なれ共。國の名物山吹煎餅。左少ながら。宜敷御披露賴み上ると。地心をこめし千兩の。桐の箱入白鞘に乘て敬ひ フシ差出せは。地親に似る子はどふでも鬼子。とろ／／眼も忽に。光り輝く金の德。詞是は／／。ヤモお氣の付しやれた。ア、結構な此お菓子。親共へ傳へませう。併なまめいた此爲たらく嘸笑ひ召れふが。何ヱ、物でござるてや。拙者はいまだ部屋住なれ共。親共が此間の心づかひで。モ俱に我等も氣拔ひ。イヤモウ／／／ぽつとりと致した故。今日此所の宴色も。壽命を延す勇士の嗜み。おさげしみ下されなと。地此場の時宜を無理やりに言くろめたるくだ卷舌。勘平猶も慇懃に。詞萬事宜敷賴み上る。最早お暇申さんと。地一禮の述て早野勘平家敷を フシ指て歸りける。地玉琴若浦笑止顏。詞堅いお方がちよこ／／見へて氣の毒な。モウ連まして歸ろじやないかと。地云折柄太夫が親方いきせき來り。詞申し／／左平太樣。太夫が身受の日限は今日。跡金の埒

明ねば外へついてござります。四方八方蜈蚣の手程引づり引ばる太夫が身受サア〳〵如何でござります。但しは餘所へ遣ましよか。地今じや〳〵とフシ氣をせかす。詞ア、こりや〳〵〳〵。夫餘所へ遣てたまる物か。此伴内が受合。今少とじや待てくれ。ヱ、どつと何じやはやい。旦那は日本誰有ふ。高の師直樣の御子息なれば。身受位にお詰りなされて堪る物か。サアけれ共まだお部屋住。何ぼ大名でも廓の金には詰るも例。夫に情ないは。親殿がお悋ふて最少とかひが廻り悪い。コレ申若殿樣。コリヤマア何と致しましよと。地術ない伴内騷がぬ左平太。詞氣づかひするな太夫は身共が身受するはいやい。ヱ、旦那そりや又餘り早脚。ハテ是りや。身受の高は五百兩。其金は爰に有はい。アアイヤ申其金は親旦那へ。ハテ大事ない。極上々のよいつぼへ持て來た此千兩。五百兩は玉琴。親方受取。伴内。我にも三百兩。夫で若浦身受せい。コリヤ必親父へ沙汰致すな。シイと地點頭主從が。我物入ずに身受の金。詞是は無間の金箱じや。山吹煎餅山吹の。花吹散す迄もない。地ヱ、有がたしと戴けば。地嘉六が浮立目出度〳〵。詞お金と證文廓で引替。改めて御祝言。千箱の玉琴打ておけ。シヤン〳〵。地騷ぐ聲々大磯の廓をさしてぞ　三重〳〵歸りける。

第　二

地比は元弘元年彌生中旬。武將足利直義公御代萬歲の吉例迎。年始の勅使は安良中納言政道公。院使の役は嵯峨の中將兼家卿。供奉の人々召具して今日登城の御饗設の殿に入給へば。壽き祝ふ鎌倉御所フシ武威暉ける有樣なり。高家の古老高の師直。權威尖き立烏帽子。大紋の袖のさばり返り。詞ナニ石堂殿。其許の獻上物内見は相濟だ。殘る獻上一々内見仕らんと。地詞の中より鹽冶判官。長上下を大紋に烏帽子の紐を引しめ〳〵走り出。詞イヤ申師直公。地と云ふを打消。詞ナニ藥師寺殿。貴殿の獻上眞綿二十把。能ござる。早々獻じられい。ハツ。イヤ申。此の判官が義は。ハイヤ此卷絹は。畠山彈正殿。ヲ、見事〳〵。取次に及ばぬ早く獻上。ハツ申。此鹽冶が獻上の義は。ナニナ

ニ今川殿は人參一箱。是りやお氣を張れたよ。貴殿も早く御持參成れい。ハツ。イヤ申。師直公申〳〵と。地云をじろりと見下して。詞鹽冶殿。貴殿は今ござつたか。イヤ某は最前より。イヤ〳〵〳〵。其言譯置つしやい。今日は未明よりと申渡せし故。相役桃井殿は早朝より詰られ。それ〳〵殊の外の饗應。夫に何ぞや。畜狐追出した樣にきよろきよろと。今相詰る不屈き千萬。イヤ未明より相詰しに。衣紋の相違。長上下とは何故なるぞ。誰左樣に申付た。そりや其元の聞誤り。若長上下も入まじき物でもないと申付たを。聞はつたは貴殿の麁相。是に御座る石堂殿の御家門なれど。どなたでも遠慮はない。重々の不調法。誤られたか。イヤ夫は。サア。サア。〳〵。アヽ暫く〳〵。イヤ石堂殿何が暫く。イヤ最前より委細承知仕る。ガ是りや判官殿の大きなる不調法。イヤ夫は。ハテ扨不調法千萬。大切なるお勅使へ饗應の役目。麁相有ては身の越度。又師直殿には高家の職。饗應萬端お差圖のお役目成ば善惡を御吟味成るゝが則お役義。心得ぬ事あらば。幾度もお尋申すが肝要なるを。氣の付ざるは鹽冶殿の。不調法と申物。ナニ師直殿。左樣ではござらぬか。いかにも左樣。何に寄ず身が差圖に隨はねば叶はぬ事だ。アヽ慮外ながら。夫に何ぞや利口だて。我儘に知るゝ物なら。マどなたでも仕て見たがよい。醫ていはゞ。何萬となき雜喉鰯を。只一引にぐつと飲込鯨の勢ひ。ハヽヽヽヽ。ハ成程。是は御尤成お譬。當時御發向の師直殿。モ肩を並ぶる者もなき。大魚の勢ひ。併其鯨といふやつも。已が勢强きに誇り身を忘れて高ぶる故。終には獵船に取かこまれ。銛といふ鏃先に貫かれて身を亡ぼす。ハヽヽヽ。何とそふは思されんかと。地鷄鶏返しに。むしやくしや腹。詞エヽ。埒もない長咄し。奥の御用を失念と。地當り眼にばつたばたフシ轟蹴立て入りにけり。地跡打眺右馬之丞。詞貴殿の心中察し入。某先年鶴が岡造營の砌。度々の過言堪忍ならず。討果さんと思ひしが。大切なる役目を重んじ。死を留つて歸つたり。已が我意を振舞ふ族は小人に等しく無禮を咎は自ら儀を制する事を失ふ。貴殿迚も其如く。小人の爲に大丈夫の志。いか成恥辱を蒙る共。大切成場所なるぞ。必短慮を出さぬが。君への忠。家の爲。ナサ御合點が參りしかと。地事を解たる眞

實の異見に。ハツト判官も暫し涙にくれけるが。詞ハア一家の因思召ての御懇情。心根に徹して忘れは置じ。エヽ地忝なしと落涙に。心を汲て石堂も。目をしばたゝきフシ居たりしが。詞ヲヽ能御得心。シテ饗應の御膳の用意はな。ハツ御勅使への御膳は。三汁十一菜と有故に。其用意仕る。ハテ心得ぬ。院使の御膳は七五三。お勅使へは五々三の御膳成が。ナニ勅使の御膳は五々三とな。スリヤ是も師直が。某に恥辱をあたへん術よな。地ハツと計に當惑顔。詞イヤ是氣づかひ召るゝな。先年某勤し時の木具一件。寶藏に納有ば。借受て間に合さん。ハヽ然らば宜敷賴入。某は御下城の差圖。今一應師直に尋たし。後刻〳〵と石堂は。次の間フシ指て行折から。地藥師寺は奥より立出。詞ヤ是れ判官殿うろ〳〵と爰に何をして居らるゝぞ。ホヽ藥師寺殿能所へ。拙者師直公に尋ねたき子細有。憚ながらお取次賴み入。イヤコレ〳〵鹽冶殿。只今は國家安全の御行を拜し我君の御前にござる。サヽ其間にちよつと御取次。アアヽ〳〵氣の毒千萬。取次て進ぜたけれど。拙者詰所に大急用。サヽこちらも急用。コレお賴申。イヤ〳〵〳〵斯いふ中も心せく。エヽ折惡い事では有と。地用事轉しに云廻しフシ己が詰所へ逃て行。地判官猶も氣を苛ち。いかゞせんと猶豫次の一間より。若狹之助はしづ〳〵と。三方土器長柄の銚子。フシ恭敬も捧持。詞ナニ鹽冶殿。間違故に御遲參。嘸お心を痛められんが。お氣遣なされな。只今上る御盃の土器。此長柄の役は其元お杓然るべしと。地相役思ふ情の詞。詞桃井殿の御深切。千萬祝着仕る。然らば長柄。イザ御請取成れよと。地請取渡すフシ其所へ。地師直立出。ヤア成ぬ〳〵。詞大切なる長柄の役目。鹽冶殿には似合ぬ〳〵。あれ〳〵祈も早納る。御盃の土器延引する。桃井殿早御出と。地鹽冶に挨拶長柄引取フシ御殿へ伴ひ入にける。地判官はこらへ兼。續て奥へ駈行しが。詞イヤイヤ〳〵石堂殿の諫の詞。用ひずして踏込ば。禮を亂する君への不忠。地家の瑕瑾を辨へずと輕蔑るゝも恥しく。胸も張裂無念さをじつとこらへて堪忍の。二字を守るは爰の事と胸撫さすれどはら〳〵〳〵。飜るゝ涙は熱湯の玉も亂るるフシ長廊下。地早饗應の御膳ぞと。取次役人禮義を正し。御殿へ運ぶ其有樣。判官見るより。詞ヤア早饗應の御膳

成かと。地心も空に奥よりも。詞鹽冶判官。勅使の御膳早く〳〵と。地呼はり出れば。ハアはつと心得鹽冶判官。用意の懸盤目八分。しづ〳〵とフシ持出れば。師直きつと見。詞コレ〳〵判官先待れよ。其膳是へ。地ハツト答てフシ差寄れば。詞是りや何じや此献立は三汁十一菜。是りや生公家の膳部。不調法千萬な。斯樣な御膳が上らるゝ物か。御勅使の御膳は。七五三と申付しに。不屈至極。早く御膳を仕替召れい。イヤ御差圖は三汁十一菜。イヤサ夫りや供奉の膳部。御勅使へは間に合ぬ。スリヤ此御膳は早く仕替やれ。地ハツト猶豫の奥よりも。詞鹽冶殿我君の御召。早く御殿へお上りなされい。ハヽ只今夫へ參上致す。サ御膳を早くとフシ次の間より。詞御下城の御用意いかゞ。サア其義も御尋申上只今知する。サ御膳延引何とする。サア〳〵と地三方四方に氣もうろ〳〵。心得用意も石堂が夫ぞと見せる七五三次へ立フシ間もせわしなく。詞サ御膳はどふじやとせり立れば。其膳是にと地目八分。捧出れば惚りし。詞ヤ此御膳は御意の通り七五三。兼て用意仕る。勅使の饗應是では勤りませふがな。ハテなア。いかにも御勅使へ早く早くと。地云に鹽冶も此座の面目立烏帽子。大紋の袖飜し御殿まぶかにフシ入にける。地師直は御膳もてもり。猶憤る頬魂。兼て同意の鷲の間より。藥師寺は出來り。詞最前よりあれにて樣子承る。ヱヽ味い所を刎返しさぞ御無念。ヱヽ思ふつぼへ持込だに。思ひも寄ぬ用意の膳部。腰押やつが有と覺へる。面白い〳〵。まだ此上の手段は。胸に。地コレかう〳〵と囁けば。詞ムヽ成程然らば奥へ。合點かと。地示合せし横車。世話を藥師寺呑込で。フシ奥の一間に入折節。地引違へて鹽冶判官。御饗膳首尾能相調ひし上。御下城の用意今一應。承はり度存まする。ハテしちくどい幾度か云聞すに。間違なふ用意致されい。ハヽ。シテ献上の品々は能ござるか。成程仰付られし通り。用意仕り置ましてござる。能ば能とナゼ内見頼まつしやれぬ。但内見致さいても苦うないと。高なめに出かけるのか。イヤ。全く左樣では。左樣でなくば早く内見仕ふ。ハヽ何判官が家來。献上の品々早く持。ハツト答て下部共。臺の數數緣先に。並べてフシ次へ立て行。地鹽冶は取て師直が。目通りに直し置。詞御苦勞ながら。イザ御内見下されふと。

地目錄を差出せば。師直はとつくと見合せ。詞なんじや。縮緬十疋白綾十疋。ム、、、こりや高の知れた獻上品冶判官共云る、大名が。ア〳〵こつはづかしい。何故最少度した獻上は成れぬ。イヤ此義は先達て貴公のお差圖。サ、、然ればさ。成程差圖は致せ共。縮緬も縮緬。白綾も白綾に寄ます。何じややら。ぺんぺこへんのびゞら切。詞び人形の着物地。こんな安い麁抹な物は獻じられぬ。スリヤ此二品は間に合ぬ。仕替さつしやれ〳〵。ハツ。今一品の獻上。器物は何じや。玄宗皇帝鳳凰の香爐。ハテなア。ドレ香爐拜見仕らふと。地箱の中より取出し。詞ム、はて見事。したが此香爐は獻上には成ませぬ。コレ師直公。今日の本に二つとなき其香爐。某先祖より代々傳ふる家の寶。此度の獻上珍らか成器物。獻ぜよとの差圖故。家の面目と存じて。差上る此香爐。何を以て獻上成ぬとは御意なさるな。イヤコリヤ御尤。イヤモウ〳〵御腹立重々至極仕る。イヤお道理〳〵。併獻上のならぬと申譯を。得と云つて聞さふ程にの。響がござるか。なくば楊枝で成と。耳を能さらへて聞つしやれ。唐の玄宗皇帝は。代を保ず亡び失たる帝皇。其愚皇の秘藏したる此香爐は不吉の器物。成どもア、儘よと了簡致し。先達て藥師寺殿を賴み。申受度云入たれ共。重代の寶と承知無き故。頻押ぬぐひ閉口致した。左程家の重寶とある大切なる寶を。何故獻上せらるゝな。サア其義は珍寶を差上よと有故に。だまり召れい。間に合口聞度ない。察する所身共等へ讓つては。何の多足に成ぬと思ひ。おちよばい切て獻上するのか。御勅使への獻上なれば。金銀を鏤め珍らか成器物を求め差上べきを。何じややら有合物で濟す勘略。マアしたい貴殿が萬事に付て略いから。ナ萬事に付て略いから。世上の譬にも。ちりを結んでもと云事が有。夫に何ぞや。不吉なる此香爐。御勅使へ差上んとは。見るも中々穢らはしいと。地香爐打破あらけなく。襖押開刎ばかま。フシ睨ちらして入にける。地判官今はたまり兼。忿怒の顏色血走る眼。奥を睨て齒がみをなし。詞へ、エ無念口惜や。忠孝の義を守り。胸をさすつてこらへしが。地數度の恥辱にせまり來る堪忍の二字。堪忍ばれぬ今日只今。我運命も。是限り。濟師直重々無念の恨の刄。今に思ひ知せん。斯とは知ず師直は。のつさのさばり歩み

來る廊下の半。詞師直待と聲掛れば。呼掛たは何事成ぞ。ヲヽ重々過言の返禮。受取やつと拔打に。地正面かざし烏帽子をかけて切付れば。コハ叶はじと逃行師直。比興者めと駈行を。留る石堂振放し。殿中深く切入ば。スハ事こそと諸大名。驚き騷ぐ　三重計なり。地不時の騷動諸侯の家來樣子聞より銘々の。主人の安否知せの往來。櫛のはをフシ引如くなり。地斯と聞より早野勘平。逸散に駈來り。詞コレ〳〵喧嘩の相人は誰人成ぞと。地尋れは下部が口々。詞ヲヽ相人は鹽冶判官殿。師直公の眉間をば。何が西瓜の如く。眞紅に切れたげな。身共等は主人の樣子。奥樣に報すべい。サア地來い〳〵と急ぎ行。勘平聞より。ハツト仰天心も空にかほよ御前息次あへず。家來も俱に。フシ跳來れば。詞ヤアかほよ樣か。勘平。氣遣はしい樣子は如何に。ハア喧嘩の相人は判官樣。師直に切付給ふと承はる。ヤア何スリヤ判官樣か。ハア地はつと計にさしうつむき。暫し詞もなき所に。フシ同じ思ひに。師直が妻操御前も甲斐甲斐敷。追取刀に駈付れば。供も徒跣の徒士若黨城内より駈來る驚坂。操御前聲を掛。詞コリヤ〳〵伴内。樣子は何と。參候鹽冶判官。饗應の役仕損じ。主人のまつかうへ切付たる狼藉故。判官は仁木修理之助殿へお預。又。師直公は疵養生有べし迚。裏御門より只今館へ御歸り。地右御報せ申さん爲と語れば。又もかほよは驚き。詞ヤア判官樣は。仁木殿へ御預け。師直殿は疵養生とな。勘平。かほよ樣ハア。地はつと吐胸の。フシ其有樣。地驚坂は大口開。ハヽハヽ。詞アヽ叶ひもせぬほて轉業。主人に双向ひ御殿を騷がす狼藉者と。地嘲る詞にこらへぬ勘平。ヤア過言なり伴内。詞此度主人の役目大切なる故。我々が心遣ひ。其場所に於て双傷に及ばれたるは。扨は師直が。主人に恥辱を與へたる故御堪忍成難く。切付給ふに違ひなし。地嘸御無念に思されん。ヱヽ是非もなき次第やと。拳を握りはらはら涙。かほよ御前も心根を。想像たる。御歎きことわりとこそ。フシ知られけり。詞ヤアずはずはと出ほうだい。主人師直公は忝くも高家の古老。鹽冶などとは富士の山と相の山ほど違つた事だはい。ヤア出過たる一言。主人の遺恨は家來も同じ。うぬ許さぬ覺悟ひろげ。ヲヽそふ吐しやこつちから赦さぬと。地互に反打詰かくれば。伴内待ととゞ

る操。詞ア、いや奥様お留成さるゝな。モ堪忍成らぬイヤ慮外者。ひかへと云ばサア先ひかへよと。地云にかほよも押隔て。詞勘平必早まるなと。地制する詞に兩人はは つと左右へ。フシ引わかる。地操の前曾糶して。詞扨は鹽冶殿の奥方。かほよ御前よな。互の夫の意趣は知らねど。大切なる今日の騒動。夫々の身の上いかゞ成べき事も知れず。其上兩家の家來が此所て討果しては。又候や君への恐れ。何とそふはおぼされんかと。地年ばい相應しとやかに。理を辨へたる一言は流石高家のフシ奥床し。地かほよ御前は師直の。妻と聞さへ心のほむら穂に。顯はるゝを押包み。詞是は〳〵。結構なる御挨拶誰有ふ師直様の奥方。鹽冶づれの自が。お詞かはすも勿體ない。しかし喧嘩兩成敗と申せば。君の御沙汰どう治りが付ふも知れず。其時はたがひの眞劍。ナ申直師公の奥様と。地眞綿に針の縫くゝり急度答ゆる。フシ詞つめ。地驚坂は羽つくろひ。詞師直公には。疵蓑生とあれば首尾は極上。操様。いざお立有れませふ。いかにも〳〵心せく。かほよ御前。是にておわかれ申ませふ。然らばお暇地おさらばと互に繕ろふ辭宜作法。遺恨は殘る驚坂が。又とびかゝるを性早の勘平。只一討とかけ寄を隔る。操かほよ花。引別れてぞ　三重へ立歸る

第三

地武藏野の月は。餘所にも。フシ並びなき。地其名を爰に武藏守高の師直が一構。身の格式を功に着て邪を愛し直なるを。妬みの餘り御殿にて切付られし向ふ疵。典藥名醫も手を盡し。フシ養生愚なかりける。地妙　婢が次の間に寄も障るも主人の噂。下々迄の口の端にかゝる折節立歸る。主の威光を鼻の先。ない智惠振う驚坂伴内。詞ヤア御病家の伽はせいで。ごくにも立ぬよはい言。地奥へ失ふときめ付れば。ソリヤ又例のにくて口。ほんに意地惡様めやと。銘々除て通り緣。フシ皆ばら〳〵と立て行。地人喰馬にも合の間の。襖押明高の左平太。刀引さげ奥より出。詞ヲヽ伴内早かりし。シテ藥師寺殿に内談の義は。ハアイヤ萬事主人の仰の通り。手つがひてうど大磯より。根引に成れた

其砌。親且那に手疵を負せ。御殿を騒がせし科。鹽冶が落命迄遠きに有ず。急度御安堵遊ばせと。藥師寺殿の御返答。ヲツトよし〳〵部屋住の某と思ひ。是迄出合ふ度毎に。恥あたへた日比の鬱憤。いかゞはせんと折に幸此度の饗應。親人に差圖を受る。鹽冶が頼みの進物として。大星より送りし金子。表向には出されぬ一義。そこを見込て太夫が見受。明た口へ持込だ判官が身の越度。何と首尾能行たてはないか。イヤモ驚き入たお前の御思案。師直公に劣りなき。遖丈夫なお生得。末頼母敷う存ると。地直ては行ぬ兩人が。噂をちらと菊の間に。見合す左平太操の前。はたと立切。フシ隔の障子。地表使罷出。詞鹽冶殿の奥方かほよ御前。何かお頼の條有て玄關に控へ有。通し申さんやと窺へば。ヤアお預の身を以て願とは慮外千萬。一刻も早くぼつかへせと。地放逸無法を壓一間。暫く待と呼はつて。立出る操の前。詞イヤ何伴内。いはば不和なる此屋敷へ。願ひと有て來られし判官殿の御内室其儘返すは道ならず。自がお目に掛り。樣子を聞た上の事。左平太は此通り。父御へ得と申入りや。兩人共にサア行きやと。地直なる母の一言に。疵持つ足の裏表別れて。こそは入にける。地仇なりと思へどいかで露程も。言で塞る胸の内。疊の目さへ悪ましき。屋敷の勝手取次の。知せに連てかほよ御前。御供の侍には譜代の家來早野勘平。股立整然と切戸口。今更何と得も云ぬ。フシ涙に膝も七重八重。願ひフシ有氣に見へにける。地操も行義改めて。詞ムヽ供は此程途中にて。一寸見受た勘平とやら太義〳〵。御勞敷やかほよ樣。判官樣の御物憂。互に夫の身の上を。案じるは女房の常。心に隔はなけれ共。自と隔たる館の内。お越成されしかはよ樣能々の事有と。思計つた私が差出。心置なふ何なりと。イザ此方へと長敷き。地挨拶萬事物馴し。道高家のフシ妻なりし。地勘平白洲に手をつかへ。詞コハ御懇切成奥方の御仰。イヤ申御前樣。お願の筋を一時も早く。仰出され然るべう存ると。地諫めに漸顔を上。詞師直樣へ願ひの品。夫鹽冶が短慮故とは云ながら。此度の誤りより。我館には在さずして。直樣仁木のお屋敷へ。御預の身と成給ふ。思ひ廻せば廻す程。其罪いかで遁るべき。地我夫の一命は。願ふも恐れ多ければ。只此上は鹽冶の跡目。詞何卒弟御

縫殿之助。家名をお繼なさるゝ樣。御願ひ申さん爲計。密に是迄參りし段。地偏に執成給はらば生々世々のお情ぞと。詫も願も中々に。取交語る目は涙。心を泓で操の前。詞家を大事に思召。切成お前の胸の中。道の道たる事ながら。跡目と仰しやるお心は。矢張殿御のお命が。助たい計りで。地ござりませうがと見透す一句。涙と俱にかほよ御前。詞有樣は其心で。叶はぬ迄も夫の命。助たいが山々で。お館迄は來たれ共。地始めより打付に。云ふに云れぬ一通り。夫の命の生死は。師直樣の御執成。多くの人の精力より貴方の只た一言が。鹽冶が家を治る壓石。頼み上ます〳〵と。涙の淵瀬神袂。フシ世の成行ぞ是非もなし。地俱に霑るゝ操の前。詞ヲヽ夫りやお氣遣成るゝな。師直殿が只管に。申上たりや御前のお赦し。必お案じ成るゝなと。地誠を明す女子同士。隔は更にフシなかりける。地咽し半へ姚初瀨。詞申奥樣。只今御主人の仰には。かほよ樣のお出の樣子。病中ながら御對面有べき由。申傳へよとの御口上でござりますと。地云つゝ立て奥の方。明る障子も悠然に心を。配る一間の中。上見ぬ鶯の威を振ふ高の師直。疵口緊と鉢卷も色紫の長羽織。脇息に寄掛れど。いつかな。痿まぬ其顔色。緣と白洲に主從が。フシ見合すも又涙なり。地良有て高の師直。詞ホヽ珍らしやかほよ御前。夫鹽冶が無念の存念。晴さん爲かと思の外。有增是にて聞つれば。判官が命乞此師直に頼んとな。ホヽ遁鹽冶の奥程有て。遁見上た魂と。地感ずる詞に操の前。詞お聞の上は申に及ばず武士の身は相互。元來お前の執成では。ヲヽ言迄もない。某が書上次第。無事で屋敷へ歸すは治定判官が一件は。仁木修理之助が預りなれば。書面を以て申送らん。女子共れうし持。地はつと答も高蒔繪取揃たる大高のほんに神共佛共嬉しさ餘るかほよ花披く硯の墨すり〳〵。詞某鹽冶と意趣遺恨もなけれ共。何やら物の間違から。御咎めの重かりしは判官の災難と云物。其咎めを清潔つとお赦し成るゝ手前が書上。地落付召れと云内も老の達筆墨濃に。フシ書認める願ひ書。詞ヤア驚坂は何國に居る。伴内〳〵と呼はれば。地はつと答も切戸口。御用如何にとフシ手を突ば。詞其方は此書面。仁木の屋敷へ持參せよ。委細の事は書中に有。地早く參れと詞の下。ハア畏奉ると。文箱大

事と驚坂は。フシ飛が如くに駈行。地見送るかほよが心の悦び。本にそふしたお心とは知らぬ我身でとやかくと。お恨み申せし勿體なさ。赦して給と計にて。心に思ふ有丈もとけて流るゝ。悦び涙。地師直ほく〳〵打點頭。詞イヤ何先刻より程有ばかほよ殿へ御酒一献。ほんに夫々餘の事に取紛れとんと心が付ざりし。地麁菜ながら御膳の用意。姚共皆來よと。立て行間も。フシ有や無。地襖あらはに駈來る侍師直に打向ひ。詞扨も今日鹽治判官高貞私の宿意を以て。師直公に手を負せ御殿を騷がせしと科に依り。則仁木の屋敷に於て切腹の儀仰付られ御檢使俱に相濟條。お屆申とそこそこに。地云捨又も引返す。跡に主從立つ居つ。餘りの事に泣もせず。仰天するこそフシ道理なり。地師直思ふ圖に當り。詞ホ、さもそふさも有なん。今朝より此使今や〳〵と待兼しが此義も是で片付たと。地詞の角を咎る勘平。詞ヤア何と仰しやる。師直公のお詞を悦んで居る其中へ。主君の切腹知せの早打。御驚きの氣色もなく御主人の御最期を。待てござつた詞の端。彼是以て心得ぬ。師直公の御心底。ホ、合點行ずはゆつて聞さん。判官が此度の越度は。執事たる某を双傷に及びし科。縛り首にも成べき所。切腹とは渠が仕合せ。有難い〳〵三拜し早く歸れと睨付れば。地かほよ御前氣色を糺し。詞ム、左程樣子を知ながら。夫に引替願ひの一通。情と見せしも僞りよな。ホ、推量の通り。仁木の使と見せ掛て。矢張御前へ願ひの趣。上を恐れぬ重罪人。早く成敗有べき旨。申上たが　地誤りかとにがり切てぞ。フシ言放せば。地短氣の勘平堪兼。飛掛らんず其勢ひ。詞ヲ、尤じや道理じや〳〵。コレ其方より自がもふ是迄と思へ共。じつと堪る辛抱は。跡目を願はん計りに何事も堪忍の。二字を守るが家の爲。地ヱ、とは云ながら淺間しや。斯る事とは露知ず。心に染ぬ追從も。夫大事に引されて此家へ來たは何事ぞ。義理も情も辨へぬ。仇は仇にて濟もせふ。聞へぬは操殿俱に女の口先で。僞り飾が本望か。夢にも斯と知ならば。仕樣模樣も有べきに。別れに一目逢事も成ぬ樣に成果しは。如何なる罰か咎めかと涙の限り。聲限り胸は幾億思ひの涙。フシ止兼たる風情なり。地折柄又も表の方。上使なりと呼はつて。入來る藥師寺治郎左衞門。直と通れば師直聲掛。詞御上使御吾

勞。イザ先是へ。病中の拙者無禮は用捨。アヽ何の〳〵。イヤ何角差置て。鹽冶が一件定てお聞成されたてござらふ。成程〳〵。承はつて安堵致した。シテ藥師寺殿上使とは。されば〳〵。今朝御前で評定極り。判官が切腹は已の上刻と仰出され。檢使の役目は大谷玄蕃。某は又其許へ上使の趣お聞召れ。執事たる役目に跨ず。御前を恐るゝ神妙の行跡。お上にも感じ給ひ手疵報養仕らば。早速出仕致されよと。有難き上意のむね。フシ斯の通りと相述る。地使者の口上都度〳〵に。聞いやましの顏と顏。無念を。忍ぶせつなけれ。師直わざと顏しかめ。詞アヽ否何藥師寺殿。出仕致せとの御意なれどなまくら双金の刀疵殊更中老の某と云ひ。此痛手では中々出仕所じやござらぬ。今日は取分て疵口がざつく〳〵。イヤモ是りや大抵ではござらぬと。地俄に繕らふ痛とは。知らぬ藥師寺ふはと乘。詞コレサ師直殿。御勅使御立の日限も早近々。御用しげい其元。典藥共に申付なぜ御療治は召れぬ。斯る大事の師直殿に。手を負せたる狼狽侍。罰が當つて無念な死樣。何と能い氣味ではござらぬか。ハヽヽヽアヽ否又ソリヤそふなくては叶はぬ筈。此師直は天下の執事。夫に何ぞや。高が五萬や十萬石の捨扶持喰ふ身を以て。某に双向はんとは身の程知ぬ人畜同前。切腹などとはてぬるひ穿鑿。此上は鹽冶が一類我目通りで縛り首。兎角左樣な事でなくば。某が此疵の平癒は致すまいと。地言並たる兩人が。わざと響かす無法の惡言。最赦さじと勸平が。氣色を目顏で止るかほよ。治郎左衞門眼に角立。詞ヤア國郡を沒收せられ。切腹遂たる鹽冶が一族。我々が傍近く尾籠至極ときめつくれば。地勸平も是迄と胸を極めて突立上り。詞ヤア浪人なれば天が下に恐るゝ者なき一本立。御主人の追善供養。師直公へ振舞んと。地衝立後ろに鷺坂伴內。ヤア身の程知らぬ毛二歲め。赦しは立じと拔打に。切込刀搔潛り柄元確と引摑。鷺坂如きのお手には合ぬ。去込て居召れと。刀たくつて投付れば。アレ搦よと詞の下。追取廻す右左り摑んで拋る人礫。あしらい フシ兼て見へたる所。地藥師寺かほよを取て引立。手向ひせばまつかふと。主人の難義にハアはつと。拵む隙間へ付込伴內。利腕取て體の重し。是非も。繩目に勸平は。惡怯もせず フシ座し居たる。地師直怒の眼を剝出

し。詞ヤア匹夫下郎の身を以て某に向ひ慮外の一言。我家に留置紀明さす。藥師寺殿には上使のお役目。御前宜しく御返答。ソレかほよを早くぼいまくれと。地權威を高の師直が。下知に引るゝ勘平も。云ねど夫と知せ合ふ。目には泣ねど主從の。中を隔つる驚坂伴内。出行藥師寺見返るかほよ。何と詞も檔の。フシ恨泣々立歸る。地跡打見遣高の師直。笑坪に入たる一間より。三方長柄携へて立出る操の前。夫の傍へ直し置。詞藥師寺様のお出の樣子。手疵本復有次第出仕せよと有上使の趣。嬉しさ餘る自が。夫を祝せし此三方。御用ひなく共只一献御看是にと九寸五分。地取出し見する夫の目先。詞サア介錯するは女房の役。腹召れ我夫と。地聞も有せず居尺高。詞ヤア御前のお目鏡に相叶ひ。出仕せよと有某に。連添儕が身を以て切腹せよとは何の譫言。エ、お前はのふ。其身の我慢高慢に人を直下す邪非道。かほよ御前の願の數々。云せて置てむごたらしう。上て落せし御前の惡言。元より鹽冶の家筋は。先祖に大功有に由り。醫御咎有迚も家を絶さぬ殿の御敎書。夫もお前が預りながら。包んでござる御所存は。ヤア入ざる汝が尋事。鹽冶に限らず總て大名小名の系圖を。預るは天下の執事。執行ふ此師直が役目の第一。斯る大事を仕出す判官。家を立んとは箇太穿鑿。切腹に極しりと内談を聞よりも。其御敎書は破つて仕廻た。イヤ〳〵〳〵。如何に預る役目じや迚大切な殿の墨附。引裂たとは云さぬ〳〵。分て大家の内と云。忠義に命打人。苟も有間數とは云れまいエ御前のお首尾の能に付猶潔く腹召ば。地却てお身の譽となり。末代殘る此家名。夫は天に喩へし物。女房の身として勿體ない。御腹勸る胸の中。推量して給我夫と。割つ口說つ理を責て諫る。誠は武士の道に背かぬ。フシ操の詞。地牙開眞白く高笑ひ。詞ハ、、、、浪人輩を剛がつて入ざる女の鼻の先。細言吐なと一口に。地言捲られて操の前。答はフシ涙計なり。地又も表に奏者の聲。詞御勅使見送りの義に付。桃井殿よりのお使者お次迄參られしが。御返答は如何仕らん。ム、何桃井よりの使とな。ソレ玄關より對面の間へ。早く地〳〵と追立遣。詞何と操。サア彼通り。某片時も居らぬが最期。御前の作法誰有て取行ふ者一人もない。出頭第一の高の師直。寒かんなぞとは及びもな

い事。イヤ叶はぬ事其方も奥へ參り。使者の饗應仕れ。スリヤどの樣に申ても。エヽくどい〳〵。切して能ば躬左平太。そちが手自腹切せ。某にはモヽヽ不吉の一言。地聞も中々忌はしと。三方はつしと踏碎き。障子ノシ引立入にける。地變ぜぬ心奥方も。思案途方に暮方の。鐘諸共に勘平が。係りし縄目其儘に。窺ひ出る白洲の内。詞縄付待と呼はつて。地用意の一腰手に携へ。庭へ徐々フシ折立給ひ。詞望み通り縄目に合。嘸本望で有ふがな。ナヽヽ何と仰しやる。運盡て掛りし縄。解に解れぬ無念な此形。イヽヤそふでない。矢猛に逸る其方が。譬千筋に搦れても引切は安けれ共。其儘にて引れし心底。師直が館の案内。見屆ける心て有ふがなア。サア此操が見拔た黑星。滅多には見屆させぬ。折能ば師直殿を一太刀恨ん汝が面體。生置ては夫の仇。地觀念せよと云ふ間なく。ひらりと交す身の捻り。解る縄目に騷がぬ勘平。詞ム、手討と見せて此儘に。助る貴方のお心はナ。數多有家中の内其方一人手に掛しと云れんも恥しく助ける操が情の獄屋。又改めて其方に竊に逢べき用事も有早立去れと地赦しの詞。云ぬ互の胸と胸。フシ立別れんとする所へ。地伺ひ聞たる高の左平太。ヤア母人の裁配でも滅多には歸さぬと。支る我子を後から鍋返しにどつさりと。押ゆる母が慈悲の杖。心殘して　三重へ出て行

第四

地伯州鹽冶の城内には明卯の刻を開城と。一決したる大星由良之助。追手の矢倉に身を固め見渡す四方は上使の本陣。挑灯明松暉かし。スハと云はゞ切入ん。フシ氣色を亂さず構へたり。地家中の面々詞を揃へ。詞我々が存るは。殿御最期の上なれば最早此世に用なき一命。上使を引受潔く。討死致すが責てもの亡君への御手向。地傍如何にと大鷲小寺。力彌も俱に勇み立。フシ勢ひ込て見へければ。地大星暫しと押止。詞主君の御無念晴さんとの御一言。尤至極去ながら。鎌倉殿の仰を蒙り城を受取役目の衆中。何恨有て弓引べき。御舍弟縫殿之助樣に家督相續有

さては。只何事も此儘〳〵。スリヤ如何有ても此城を。ヲ、渡さぬ時は猶以て亡君への下忠と成。但し不忠を厭ひなく。仇を報ふ御所存か。サア其義は。サア破るは安く 地守るは難き某が心の推量有れよと。事を制する大星の詞にはつと一家中。無念をフシ包む折柄に。地諸士頭織部彌次兵衛。屆せぬ老の汗雫斯と見るより聲荒か。詞ヤア由良之助殿。承れば其元には。彌〻此城を明渡す御所存とな。尤亡君の御誤りとは云ながら。相對向の口論に片手打なる今度の計ひ。夫に何ぞや。城を受取法式迚あた胸悪い仁木荒川。追手搦手取圍む陣立が氣に喰ぬ。夫も厭はず開城とは。アノ備へを恐れてか。ソリヤ貴殿小量〳〵。陣取を打崩し其後城を渡すが腹いせ。地イザ大星殿人數の手配。某魁仕らんと。フシ忠義に逸る一徹老人。地由良之助打點頭。詞ホ、御老體の思召委細承知致せしが。爰を能お聞成され。最前より櫓に上り。本陣を見渡す所。堅固に固めて堅固に非ず。開城は明卯の刻と約したれば。城内の雲氣を計石火矢大筒の道を避。明るを待て門に入。是軍法第一成に。況や敵城の的に成。陣の道法三十町。某城に取籠り。渡さぬ心に決着すれば。輙く野陣すべきや。開城せんと約せし上は。如何程陣取有迚も此方に構はぬ事。心を爰に持ゆる者一人も居合さぬ。アレ式の陣取なんど某引せて見せ申さんと。地豫て用意の唐竹に移す火繩と火藥の勢ひ。ぱつと燃立。火の光り。上るや否や本陣の。的點挑灯一時に引退きし追手の備へ。連れ勇々敷大星は實良將の神變やと。フシ感し入たる風情なり。地小身なれど侍の一筋道を何處かは。足輕寺岡平右衛門並居る諸士に兩手をつき。詞御下の丁人百姓共。銀札引かへの仰に寄て。只今是へと相述れば。地由良之助力彌に向ひ。詞彌次兵衛殿諸共に。とく〳〵用意致せよと。地差圖にはつと大星力彌。諸士に引添寺岡も。フシ身を卑下してぞ歩み行。地時は亥の刻不寢の番守り嚴しき城内に。柝の音喧く。透間を密と斧九太夫。殿の用金盜出し隱す所は幸と。思付たる櫓の上。取出す小判二百兩。詞是からは又割付の金。先夫迄は此大筒。地宛竟一と手敏捷隱し課せし煩惱の。犬に劣りし煩體。フシ舌打してぞ入にける。地銀引換の刻限迚。御下の町人百姓共。お召に寄て參りしと口々に訴れば。札座or役人

織部彌次兵衞。銀預りは大星力彌。小寺大鷲平右衞門。てんでに銀箱持運ぶ。其數あまた門外に。狹しとこそはフシ積上たり。地老分なれば織部彌次兵衞。詞ヤア先達て申渡した通り。其方達が所持の銀札。殘らず引換遣す條。地大星殿の御差圖と物和かな詞の端。皆々はつと蹲り。詞ハヽ、お慈悲深い殿樣がお果なされたお尊を。聞て身も世も霰の涙。濯して計居りますと。地戴く恩に眞實の。フシ涙は何れ變なき。地大星力彌目を睫き。詞ヲ、しほらしき其方達が。心を察して今宵の時宜持參の銀札早是へと。地差圖に銘々懷より。取出す札の甲乙を。彌次兵衞一々帳面に。記す銀札夫々に價る銀の取捌き。我よおれよと大勢が。戴く手許足早に。フシ我家々へ歸りける。地待に待たる斧九太夫。貪欲邪智の向ふ見ず。詞サア引替が片付たら。割付致さぬ其先に勘定聞が是第一。ヲヽ成程成程。先達て此織部が渡し置たる銀札の表。此帳面に記し有。地御覽なされと差出せば。九太夫目鏡取出し。置算盤のつぶつぶと。讀銀高は口の中。詞ムヽ銀札の〆高百八貫九百六拾壹匁。ムヽコリヤ合ます。サア力彌殿。シテ用金の〆高はナ。ハ此城内の有銀。都合七百六拾貫目。ムヽ夫も合ます。サ殘りし金子お出し成され互に立合改ませふ。ハヽ御苦勞ながらと。地おとなしき。父が讓りのお金役。大鷲小寺も俱々に。詞コレサ平右衞門銀箱脇へ片付と。地詞に付て活然と廻る足輕性根惡の。九太夫がけでん顏。詞コリヤ是金が足ませぬ。少々の不足なら其儘にも致さうが。凡貳百兩計。割付致せば餘程の金子。此金はどふ成ました。サア何とてござると　地押强ふ仕込だ己が惡工み。知らぬ此方はフシ當惑顏。詞イヤ何力彌殿。如何にお若い迚。大切な此場所へ。足輕風情を引込で。金銀出し入召るゝから。斯樣な事が出來申と。地當擦られて平右衞門。詞イヤ〳〵申九太夫樣。見る影もなき拙者奴故お疑ひは御尤なれど。手一合でも。御扶持頂戴致せし此身。毛頭左樣な。ヤア吐すまい。先刻より見る所。小身者の形をして。兎角ちよろ〳〵と廿日鼠を見る樣に。合點の行ぬ其奴が頬付。サア有樣に吐さば能。隱すが最期水くらはせ。地白狀さするとかさ押も外に盜人拵ゆる。非義も非道も分たばこそ。奇怪至極と平右衞門。刀の鯉口止る彌次兵衞。詞イヤコレ九太夫

殿。今其許の一言では慥にかれが盗みし趣。何ぞ慥な證據ばし。ホ、證據と云ふはお金の不足。又彼奴等如きが此場所へ立並んだ申譯は。サア夫は。云譯なくば平右衛門。盗んだ金を其處へ出せ。サア夫は。地サア／／／と迫掛られ。フシ返答飽倦折柄に。詞其金拙者が差上んと。地呼はり來る天河屋。様子は何か白臺に。乗て出たる千兩包。フシ目通に直し置。詞判官様の様子を聞。せめて御恩を報ずる爲何をがな御追善と。思へど叶はぬ。私風情。殿様お果成されし上は。此後用なき天河野。家を立べき望なし。家財殘らず賣代なし持て參つた此金子。貴方がたの寶と云はお腰の物。我々が寶とするは金銀より外ないと云。夫程淺間しい町人に。生合した無念さを御推量下さらばと。夜を日に繼て急ぎの道中。參り掛つた今日只今。物陰にて何かの様子。聞ば聞程寺岡殿の。難義を救ふと思召。お遺成されて下さらば。義平が殿への追善供養。地偏に願ひ奉ると。此場の縛を解ほどく。誠性根の置所是ぞ男の鑑なり。地力彌を始め大鷲織部感ずる計誰有て。兎角の諾なき折柄。詞亡君への御追善慥に受納仕ると。地呼はり出る由良之助。義平に向ひ涙を浮め。詞ヱ、遖見上た貴殿の魂。草葉の影の御主人も嘸滿足に思さんと。地慈愛の詞に。ハアはつとフシ恐れ入たる計なり。地暫く有て平右衛門。詞ハ、義平殿のお情に寄て。拙者が難義もさつぱりと。ヤア晴たとは横着者。紛失したは殿の金子外の金では事濟ぬ。あく迄も此詮議。九太夫が仕て見せんと。地邪掛れば短氣の彌次兵衛。詞ヤア何の角のと論は無益所詮我々入ざる一命。アノ大筒に玉を仕込。一時に打果すが上分別。地覺悟召れと立騒ぐ九太夫押へて。詞ア、是々／／めつそふな。大筒に打れ死んとは跡先知らぬ出放題。イヤ／／互に武士の云掛り。地是非大筒とおどしの詞。詞ア、是々々モウよい／／／。金の詮議もさらりつと。流してしまへば事は濟。コリヤ平右衛門。最前のは身共が麁相。氣に障つたら了簡せよ。是じや／／と掌を合せ。地隱せし金に目が眩て。夢中になるぞ フシ見苦し。地大星重て。詞某愚案を廻らすに。此儘城を渡すも殘念。仁木荒川の兩使を引受。刀の目釘の續かん丈。切死致すに一決せり。ホ、夫こそ我々望所。地急ぎ御用意／／と。悦勇フシ誠と誠。恂りしながら斧

九太夫。詞有様は其詞を今や〳〵と待てをつた。左様ならばツイちよつと。何れも暫く御用捨と。地立を力彌が引止。詞打死なさる身を以て。何國へ行召九太夫殿。サレバ〳〵何を隱さふ此程より。折悪ふ孫めが疱瘡。何が常々某があまやかしたが今度の難義。毎晩熟の譫語に。祖父様呼でと泣居ります。暇乞にツイちよつと。孫めが顔をと云捨て。金配分も匆卒に。フシ足を早めて歸りける。地ヤア人でなしの斧九太夫捨置て大星殿。イザ御立と勸れば。由良之助莞爾と打笑。詞不忠不義の九太夫が。性根を試さん我計ひ。ヤ何義平殿にも今暫く休息の後歸宅あれ。力彌案内仕れ。何れも門に入れよと。地忠勇無双の大星が枕を安く傾くる。様子白髪の彌次兵衛も。フシ連て皆々立て行。地今日籠城の約束も我身の繼に引されて。思はず洩し神崎彌五郎。フシ先非を悔死覺悟。地麻上下も我身には。直には冥途の死裝束。城の邊りに一人言。詞有れぬ義理に繋れて。今更城へ入事叶はず。譬籠城なる迚も。どの頻さげて大星殿へ交す詞の有べきか。地生て御勘氣受ふより死て不忠と云るゝが。せめて此身の申譯。斯云物の我迚も。詞神崎彌五郎共云るゝ武士が。地不忠不義の名を殘し。切腹するが無念なと。暫し涙に眩居たる。兼てより契りを二世と。地室の津に馴染重ねし傾城逢夜。禿の市彌にさゝへを持せ。走り來る先見合す顔。詞ノウ彌五郎様。能死ずに居て下さんしたと。地縋り歎くを取て突退。詞其方故に彌五郎が斯る大事に後れし上は。何面目に生延んと。覺悟極めし此場所へ。慕ひ來りし狼狽者。エヽ見下果たる女めと。地目には脱めど漏涙。詞イヽエイナ。お前も知て居さんす通り。元私が爺様も。岡野兵左衛門迚鹽冶様に仕し人。聊の誤りにて。御勘氣受しを悔みの餘り。地死しやんした此年月。流れの身とは成たれど。詞昔を忘れぬ侍の娘。理に迫つた夫の切腹。何で未練に留ませふ。地責て此世の暇乞名殘の盃せん爲に。折角尋て來た物を。むごい心と露にうく。フシ涙は粹の替なき。詞ヲヽコリヤ能氣が付た。夫と知たら何の呵らふ。堪て　地枕に縋り寄。岩木成らねば蘆竹の。直に末期の水盃。是が此世の別れかと。さいつ押へつ盃も。禿諸共フシ三がなわ。詞ノウ逢夜又一つ受た程に。何ぞ肴は。サイナア其肴には經陀羅尼。イヽヤ

お經より念佛より。最一度そなたハ、、、、。是りや末期の水が廻つたそふな。そなたの手前も面目ない。イヤ〳〵後れたり未練なり。地いざや最期と彌五郎は。刀逆手に取直し。既に斯よと見へけるが。詞イヤ最ふ死まい。ヱ、夫りやお前何として。ハテ何としてとは能思ふても見や。肝心の主人に離れ今腹切て死だ迚誰譽る者はない。是からわつさり町人と氣を更てそなたと一所に暮すが本望日出度〳〵。サ、、、、祝ふて最一つ。コリヤ堪ぬと　地卷舌に。縺れ逢夜が手を取て。詞コレ君。死ねば不忠と笑はるゝ所を。死ぬは何と粋か。是も誰故其樣故。よもや憎ふは有まいがと。地小竹筒を枕に現なく。打て替たる有樣はフシ是も不思議の一つなり。地逢夜はわつと聲を上。そうした比興な心とは今迄私も知なんだ。詞ヱ、是いナア氣を付て下さんせ。不忠未練と笑はれても。お前は何共ないかいな。地正氣に成て下さんせと泣ど叫べと高鼾現たあいもなき夫。女心の一途に胸も張裂腹立涙。有合土産盃も打付〳〵身を投伏て歎しが。漸に涙を止め責て此身が侍の娘でなくば笑はれても。微塵も私しや厭はねど。詞此儘添ては父への不孝。詞とは云ながら潔。死しやんしたと聞ならば。私も其座で死まする。責て未來は心よふ。女夫に成て下さんせと。歩めど跡に引さるゝ。名殘惜の泣別れ。是非泣々もフシ歸りける。地始終を得と大星が。胸に納めて角櫓。聞とも知らぬ城内にも。窺ふ寺岡平右衞門。屹度兩手を組返し。詞若氣とは云ひながら。見下果たる腰拔侍。身不肖なれど寺岡が。性根を付て呉んずと。地ずるりと拔て切掛る。透さずさゝゑて丁ど受。詞コリヤ平右衞門何するのじや。ヤア何ととは落付自慢。黑い眼で睨んで置た。臆病武士の腐敗り魂透計と洗ふて見せん。ホ、我をさみする汝が不忠。此彌五郎が首は切ぬ。馬鹿盡すなと刎退れば。ヤア足輕なれ共親代々。忠義は忘れぬ某を。不忠とは何を以。其座は去らさぬ神崎彌五郎。覺悟召れと云間もなく。地又切付れば打開き。ホ、不忠の證據能見よと。取出し見する神崎が。羽織の紋に恟り仰天。詞サア不忠と云たが誤りか。其方が親平右衞門。足輕なれ共御主人の御目鏡に相叶ひ。御紋付の此羽織。手自殿の給はりし。父が拜領。子の身として賣代成せし汝が心底。知まじと思ふは不

覺。廻り〳〵て某が買求たる今此時。云譯有ば言へ聞んと。地洗上たる誠には。双向ふ劔の双もなまり暫。フシ詞も無りしが。地涙拭ふて平右衞門。詞大切な殿の拜領。此方樣のお手に入たるは亡君未捨給はぬ。お情深き御恩の一重。賣拂つた申譯は。腹掻割た上の事。地介錯頼むは神崎殿と。又取直す刀の柄。詞寺岡平右衞門暫く待。腹の切樣まだ早いと。地止る大星由良之助。彌五郎に打向ひ。詞始終を見聞大星が。割符を合す殿の拜領。買求めたる貴殿の心底。夫に引換平右衞門。賣代なせし申譯。迚も切腹仕らば。下し置れし其一品。某に戻し置。其上腹は仕らぬ。アイヤお戻し申迄もなく。彌五郎殿の所持召れば。イヤ左に非ず。汝が胸に納め置。御召替の御紋付。大星慥に受取らんと子細有フシげな詞の端。地寺岡頼を土に摺付。詞返答申も憚りながら。神崎殿も聞て給べ。御扶持は戴きましたれど　地小身者の悲しさは。悔んで返らぬ父が大病。詞介抱愚かなき中も。次第に迫る貧苦の責。襄祈禱の價にさへ。盡果た手詰際。漸〳〵殘る主君の拜領。已れやれと思へ共。親の病苦を助るは。是もお主のお情と。心一つにお詫を申賣て仕廻つた御主人の。一重に掛る露程も。地忠義の二字は忘れまいと。殿の御紋を其儘に。左の腕に彫入て。是非も涙に。フシ賣拂へど。地御恩は爭で脫まじと。一心籠たる申譯。是見て給べと寺岡が。差出す腕にでつかりと。連殿の御紋付。フシ賣頼もしく見へにける。地彌五郎も感じ入。詞我迚も先其如く。此程よりの評議區。察する所今日只今。諸士の面々籠城と聞やいや。皆我一に殉死せんと。思ふ心に引替る。大星殿の胸の中。得と見拔し此彌五郎。遲參の體に見せたるは。九太夫なんどが邪非道。膝並ぶるも胸惡く。不忠に此身は穢さじと。固置たる其より。驚き入た御邊の魂。夫共知ず早まつて。疑ひしは我誤り。地とは云ながら殿の召替。思はず我手に入たるは。貴殿の忠義の屆く所。改めて其元へ。返進申と差出せば。忝涙に平右衞門。思出したる爺親の。フシ別れは無と知られたり。地大星も詞を正し。ヲ、實香しき彌五郎殿。其身の色に大事を忘れ。連添女に見限られし。心の內の大丈夫。寺岡迚も其氣に同じ。大切な殿の召替。苟も其儘には賣間敷と。性根を見込だ由良之助。切腹を止めしは。ヲち

が忠義を立ん爲。誠は今ぞ顯れしと。地云ず語らず双方の。魂見拔大星が上に立たる明智の詞。フシ理に伏したる折こそ有。地主は誰とか白双の切先。目當は松枝覺への手の中。驚く兩人由良之助。騷ぐ色なく件の小柄。拔取てとつくと。詞見ヲ、報知の早打延引の。科を身に知る早野勘平。腹切刀の先走り。慥に落手仕る。早々是へ來られよと。地詞にはつと答さへ。折目高なる袴の肩。霑るゝ色なく。早野勘平。詞只今下着仕る。地遲滯の段は御用捨と。フシさも悠々と押直る。地大星急たる面色にて。詞ヤレ待兼し早野勘平。主君御最期の砌より。毎日來る數度の早打。中にも貴殿の延引は。由良之助が使の進物。左平太に渡したる其誤りにて今日迄。到着召れぬ早野氏。今籠城の時に合。一つの功ばし有ての義か。承らんと詰掛る。地少とも捺まず手をつかへ。詞大切な使の趣。師直へ渡しなば斯る大事に及ぶまじと。思ふ程猶片時も。生て居られぬ此身の上。腹切死んと一決の。胸は居ても今一度。貴公の御目に掛り度。念願屆き一つの賜。則是にと勘平が。首に掛たる帛紗物。大星の手に渡し遥下つてフシ畏る。地樣子如何にと由良之助。とく〳〵解帛紗の中。あかしに一目見て惚り。詞ヤア是こそ敵師直が。預り置し主君の譜。手に入た其子細逐一に明されよと。地云間も待ず腰刀。拔て手も早野勘平が。弓手にぐつと突立れば。コハ〳〵如何にと立寄て。詞何故の切腹成ぞ。狂氣せしか血迷ふたか。何と〳〵と詰寄二人。勘平苦しき息を繼。詞狂氣も致さぬ血迷ひもせぬ。奥方かほよ御前には。何卒御舍弟縫殿之助樣に。跡目相續有度望。態と仇ある師直へ。願の綱も切果し。强惡無道の師直には。似ても似付ぬ操の前。女義ながらも心の誠。後の禍遠からんと。述添夫に勸める切腹。切腹死ば我々が。誰を敵と付狙はん。心を痛る折幸。某を竊に招き。詞夫の一命助るならば。再び興す鹽冶の譜。自ら竊に手渡しせん。然る時には大星始め。數多の諸士。此後夫師直を。敵と覗わぬ誓ひの神文。譜と引替受取んと。のつぴきさせぬ頼の一言。地二言と云ず受合し心の底は僞飾り。大星殿を始とし書て送りし誓紙の表。道女のあざとくも。安々渡せし其日より。斯ならんとは兼ての覺悟。詞討て叶はぬ主君の仇。約束違ひし神文の。何れもに成代り。此

身一人相果れば。罰も誓ひも是迄〳〵。地とは云物の我迚も。亡君の仇を討。何れもと諸共に。腹仕らば其時の。悦は如何計と。思へば彌ど此身の最期。敵の爲に義を立て。命を果す無念さを。推量あれと兩眼に落る涙と血は瀧津瀨。道理至極に誰々も。感涙催す計なり。地由良之助涙を拂ひ。詞其悔去る事ながら。家を立べき此御教書。師直が手に有ば。引裂捨んも計れず。得難き譜を奪ひしは敵を討より大忠臣。猶も貴殿の最期の樣子。深く包むが肯詞の表。むだ死とばし思はれそ。地是さへ我手に入上は。上使に城を明渡し。諸士の心を計りし後。師直を討一味の最初。詞早野勘平光重と。此大星が心に血判。最期を淸く有れよと。地諫る一句に手負の勘平。忝涙の顏ふり上。詞千萬石の御加增より。遙に勝る御一言。心魂に染渡り。死共魂此途に殘り。敵討の御供せん。地早お去ばと引廻す。刀は國重勘平が。末期の思ひ。晴て行日比心の花曇り辭世を殘す早野村。武士の誠の假名手本四十七字の其一人。忠臣早野勘平が最期の程こそ哀れなり斯る歎きを俱泣に。袖は涙の天河屋。しほ〳〵としてッシ手をつかへ。詞何から何迄お心遣ひ。責て一つは義平めがと。申に甲斐なき町人の身の上。長居は恐れ地とッシ立上る。詞義平殿先暫く。聞ねど知た其元の。御心底を感じ入。賴上度一通りお聞入下されふや。ハアコハ改つたお詞。御用達の私なれば。一命は申に及ばず。如何樣の御用でも承はるが身の冥加。シテお賴の有ましは。アヽいや〳〵。子細ござれば今は申さぬ。開城の後竊に御意得。先夫迄は隱密〳〵。然ば拙者はもふお暇。今宵は屋敷に一宿共。頓て御來駕相待ます。ホヽ所存を明すは又重ねて。國境迄見送りの。役目も足輕平右衞門。そちが性根も見付し上は。鎌倉への早使。地持參致せと差出す書通。詞ムヽ宛名は石堂右馬之丞樣。ヲヽ云にや及ぶ急ぎの道中。彌五郎殿には勘平の亡骸宜しう賴み入と。地差圖も涙見る涙。神崎も差寄て。詞死すべき我は生殘り。思掛なき勘平殿。無慙の最期とゝ地計にて。ほろりとこぼす一雫。手向の水の深き緣。止る義心天河屋。義平に連て鎌倉へ。足も輕々平右衞門。逸足出して。ッシ急ぎ行道引違へ遠見の者。宙を飛して馳來り。詞御舍弟跡目の御願ひ。今暫くは事延引。何角の落着相濟迄。

播州佐用の御屋敷へ。お預と成給ひ。只今濱手を御通と。地息繼敢ず フシ訴ふれば。地力彌大鷲彌次兵衛小寺。ばらばらと走り出。詞跡目の願ひ叶はぬ上は。猶豫する所に非ず。兩使を引受 潔く。討死せんと口々に。地逸り切て駈出る。ヤレ待れよと押鎮。詞勘平が最期の詞。必ず急事なかるべし。早開城の刻限なれば上使に約諾せし通り。玉を込ざるアノ大筒。城相渡す我々が。敵に後を見せざるの。心を祝ふ首途の大筒。晉を相圖に入來る上使。手向ひするは却て不覺。暫しながらも城内へと。地又も治る時津風。四海に暉く大星に連て フシ皆々入にける。地早開城も近付ば。櫓へぬつと定九郎。傍見廻し獨言。詞仁木荒川兩使より。大筒を盗出し渡すならば褒美は望み畏つたと受合た。時刻も丁ど此時と。地飾りし大筒引退る。はづみに中よりぐはらりつと。落たる金に目を光らし。詞ヤア是りや金じや小判じやと。地拾ひ集めて思案顔。詞ム、是りや最大筒を盗んで遣る。約束變改高ぶけり。跡は野と成れ櫓から。いつそ飛ぶか。イヤ〳〵〳〵若しくじつたら一大事。夜明ぬ内に水門から。夫よ。地〳〵と打點頭。金の代の玉藥。仕込に仕込惡工。ちらと力彌が見るぞ共。知らぬ定九郎櫓より。おりて行衛は白浪や。フシ身の成果ぞ淺ましき。地斯とは知らず斧九太夫。隱置たる金よりも。我身を隱す頻被り。思案しがくの大小も。斯樣の時と石垣の。透間へぐつと差込足場下緒手繰て松枝に。打掛て引力綱。我慢の脚骨踏塊。上る足場の暫時も。心放さぬ大星力彌。火縄隱して フシ伺ひ居る。地我子の工に陷る共。微塵白髮の鍬頭。手を差延し掛るや否。思ひ掛なき大筒の。晉はどつさり九太夫は。微塵に成て飛散しは。心地能りし最期なり。地大星始め數多の諸士。首途の血祭六ツの鐘。早明渡る開城の。相圖を待し上使の備。向ふの海手は縫殿之助。古郷の城も餘所に見る名殘追風の門前には。諸士の面々引連て海邊遙に見送る大星大手は馬の高嘶き。猶も無念の勢ひにて。又も進むを由良之助。荒氣を出さば某が。亡君に成代。七生迄の勘當じやと詞にはつと控ゆる諸士。地無念を爰に殘し置思ひは。後にぞ三重知られける

第五

地浪速津や。フシ初音を聞に。北野路に。續く家居は曾根崎村。伯州鹽冶譜代の家來加藤郷之助が侘住居。月日重る長病の。フシ重きが上の貧しさに加持も。藥も。フシ及びなき。地勸進廻りの願人坊。門口から聲高に。詞此度高野山に建置丈六の地藏尊。志はござりませぬかなと。地鈴振フシ立れば病の床。枕を上て主の聲。詞イヤ無人の上病人じや。通らしやれ。通られよと。地云ふを仕込づゝと入り。詞コレハ〳〵。御病人なれば猶の事。抑此地藏尊は弘法大師の御母を葬つた其灰を以て。嵯峨のお釋迦の行水汁で練立て作つた尊像。病は癲癇吐血中風傷寒熱病時行風痃癖のつかへた迄も。お直し成さんれと有御誓願でござる。則是此合へ。米一杯上らるれば。地如何成因緣因果の業も。忽雲の晴るが如し。夫で此米入をごうと號給ひしと口からフシ出次第勸ける。詞ム、米も進ぜたら宜けれど。渡世渴々と大貧者。定めて米も無でござらふ。ハア貧なれば猶以て。信心の輩には幸を下され。金銀滿家繁昌。夫故御名を福錄地藏と申すなり。ム、福錄壽と云は畫でも見たが。福錄地藏とは。ハテ珍らしい事聞ました。サア其畫に有と同じ事で。此方の地藏樣は。天窓がぐつと長ふござる。繪に有はげろう殿。是は惠方の福地藏。地米がなくば燈明料。賽錢でも苦しうないと。何邊へフシ倒ても取込辯舌。詞ア否々鳥目は勿論不自由。殊に是迄其地藏殿の類ひには。近付に成らぬ拙者なれば。其相談出來ませぬはい。アレ〳〵。下の町に魚賣の聲がする。アレ呼で下されぬか。ヤア錢も米も吳ずに。まだ用を云付るか。テモマ氣强い親仁じやと。地囁々門口を。出る向ふに魚賣。腹立紛れ呼掛て。詞コレ〳〵〳〵。爰の內に夥しい客が有て。魚屋を待て居る。サ、、往て賣しやれと。地云捨て。歸れば合點と門の口。擔ひ込だる魚の色々。詞ハイ申し。御覽じやつて下さりませ。先鯛魴生貝。伊勢海老。此樣な物で能ござりますか。サア躾が誕生日なれど。拙者は見らるゝ通りの貧者。目出度物の下直な物。鱗が少し欲うござる。

エ、。ハテ扨々埒もない。併此内の様子てはア、其様な事で有らふと思ふた。高が一升二十四文の鱈。有てからして持ては來ぬが。幸な事が有。コレ／／／。今向ひ側て作つて遣た鯛の頭。鱈の代にコレ是遣やんしよ。武家高家でも調法する。ハ、鯛の首じやと。地打鉤取て指出せば。詞ナニ武家高家に調法する鯛の首。ムウ好もない人に物貰ふは嫌いなれど。此首は添い。急度申請ますと。地逶迤／／立上り。鉢取出して移し受け。ハツア目出度首を貰ふたと。戴く胸は人知らず武士の性根の。フシ心祝ひ。詞扨ても強い首好なお人じや。又持て來て遣ましよ。ア、能得意が出來たはいと。地笑ふてこそはフシ急ぎ行。地主は跡見送りて。元の塒の紙蒲團。枕傾く永き日や。野路の。千草も深編笠。歩寄たる。フシ立派の侍。ヲ、イ。／／と後から呼戻す二人の男。見るから泥と鑑板を打付に強乞醫。詞ヤお侍一寸待て貰ひやんしよ。ア、否樣よ急な。／／。何大星力彌殿と見受申した。九太夫が躬。斧定九郎でござる。ガ些と頼たい筋有てと。地聞て此方も笠脱取。詞ホ、珍しい定九郎殿。お互に堅固で重疊。アイ無事では居ますが。見らるゝ通り浅猿しい此風體。モ長ふは云ぬ。合力が仕て欲い。サ金が借て貰ひたい。ホ、此方迚も漂泊の浪人。奉公手掛り求ん爲。今日も當所へ出しが。抽者は取分親任せ。金銀の貯へは。ア、ないと云の。コレ力彌殿。今喰物もない定九郎。銀がなくば其羽織。衣裝も脱で貰ひたい。何と云るゝ。我衣服を脱て渡せ。ヲ、定殿の云るゝ通り。細言云ずと前髪様。サア脱んせ／／／。ハ、、、、定九郎殿。此方コリヤ悪い渡世を成るゝの。ヲ、悪い商賣合點じや。權。失敗なと諌せし。地双方より胸元を確と取ば騒がぬ力彌。詞畫盗賊コリヤ手向ひかと兩腕左右へ引寄て。地蹴上る早足兩人は襷落しに倒臥。又起上つて取付我武者。身を交して双方の襟髪摑んでどうど投。拔より早き胸打の拉々潑しとフシ打倒せば。詞ア、これ／／最手向ひは致さぬと。地掛損ふた。畫蔦羽を窄て。逃返る。地大星は刀を納め。衣紋繕ひ此方なる。藁屋の軒に歩み寄。詞誰ぞ御案内頼ませふ／／。ハア何方でござる。病人の義なれば。是へお通下されい。地然らば御免と内に入。顔見合せて。詞ヤア是は／／力彌殿。珍しき御出と。地頼屋ながら

奥の方上座へ。こそは。フシ請じける。地力彌座に着一禮し。詞郷之助殿。打絶て御意得ませぬ。見ますれば御長髪。御病氣でござるかな。仰の通り去多より氣の勞と有て此大病。先づ以て其元樣。御堅固にて大悦致す。シテ今日の御出は。ホ、。只今參りしは父由良之助が使。御主人鹽冶殿一城落着の砌。各と申合せ印形に及びしが。夫より家中思ひ〳〵に他國へ散。銘々妻子を育み兼。再び主人を取も有。殊に貴殿は繁花の町に近くござれば。拙者が有付もお頼申し。又其節の印形も。お戻し申しに參りしと。地聞て恟り。詞何。スリヤ其元樣にも。アノ奉公のお望みか。如何にも左樣。ム、夫りや能ござらふ。左樣なら。御返し成さる物請取ませふ。成程印形お渡し申さふ。ア、否。請取物は外に有。ム、。然らば何を。ヲ、。由良之樣殿の腸の摑出してお渡し成され。ナント。否さ無體は申さぬ。御主人の敵高の師直。時を待討取て。亡君の御怒鎭ん爲に此艱難。我はお役に立ず共。責ては躬の與茂七年若なれど平生に侍の道示し聞し。今日や由良殿から使が有かと。日を算待兼たるに。見限果た腐魂。嶽らはしい。歸られよと。壘叩いて荒涙丈夫の氣性顯せり。詞ホヽ其心底とは察しながら。若違變も有ふかと僞つたは拙者が誤り此度亡君の御舍弟縫之助殿師直が計ひにて。御首討て出せよと武將よりの嚴命何卒お命助け度。父由良之助心魂を碎く所。年樂少し違へ共。縫之助殿面體に能似たるは貴殿の子息。與茂七殿を御身代に一命を給はらば。忠臣の魁此上の有べきか地是をお頼申せよと親共が計ひと子細具に物語れば。詞ム、すりや最前よりの詞は虛言よな何にもせよ悴が顏。縫殿之助樣に似たるこそ與茂七が身の大悦。追付歸らば彼奴にも。物竊に得心させ。急度御役に立申さん。地爰は端近人目も有。頽屋なれど次の間へ。ホ、遮の御心底然らば御免と大星は勝手へこそは入跡へ働き戻りの與茂七は。親の病を片心數居越るも急促と。汗水に成立歸り。詞ヲ、是は〳〵親父樣。今日は快かして。爰へ出てござりますな。ホホ戻つたか待兼た今日は大分心能。マア支度でも仕たが能イエ〳〵私よりはお前に何ぞ進ぜたい。アノ河内屋の壽麥切が能らふか。エ、頓と最思ふ樣に成ぬ事じやわい。コレ申しお前に云ふ事頓と忘れた。今日長田屋と云相場屋へ雇は

れて行ましたか。商ひの狀使仕合の能つた褒美。三斗俵遣と云て。追付仲衆が持て來ます。ホヽ翌から何程米の飯喰ふと儘じや。嬉しい〳〵。マヽヽ悅んで。下さりませと。地何がな親へ孝行の氣を引立る藥違ひ顏打眺め。詞ヱヽ狼狽者め。醫餓死すれば迚。齊も武士の躰ではないか。人に雇はれるさへむやくしいに。町人の米一粒でも囓へば家來に成も同然愚しい奴なれど魂は武士と。親心に思ふて居るに。いかに身貧に成ば迚。根性迄其樣に成下つたか。エヽ淺猿しい素町人の物貰ふて煙を立ふと思居るか。見下果た。躰めと。地睨付る目に腹立涙一圖に固る武士氣質。呵付られ返答も。謝り入たるフシ律義者。折柄門に仲衆の聲。詞與茂七内に居るかい。褒美の米持て來たと庭に撞然米俵見向も遣らず鄕之助。次の間フシ指て立て行。仲衆は何の氣も付ず。詞コリヤ與茂七。何を茫然つとして居るぞへ。今の米を旦那が進上。サヽ爰へ來て受取ぬかい。イヤ最夫は貰ふまいヨ。ヲヽ何といや。アノ只遣物を吾りや否か。ヲヽ持て逝て貰はふ。此奴氣體の惡い奴じやはい。ヲヽ能思ふて見れば。便もない物貰ふてはな。何程腹が大きう成ても。何も濟ぬ否じや〳〵。ハテ雇れ賃を取た殘りが爰に丁ど十四文。親父樣に粥炊て進ぜて。吾が喰ずに居りや濟はい。早う持て。サヽ去しやれと。地首打振詔はぬ。性根は加藤がフシ子なりけり。地仲衆も勃と腕捲り。詞ヤ惣體北の習ひで。人に物遣ろと云て。突戻されては立たぬはい。イヤ〳〵貰ふては此方も立たぬぞ。立いでも遣にや置ぬのじやい。イマ戻すイヤ遣る。イヤ戻す。イヤ遣ると。地双方が力身立たる。フシ其折柄地門に立聞升屋の娘。おかなは笑止さ駈入て。詞與茂七樣。待しやんせ。お前方も迫合ずと。マア鎭らしやんせ。ホヲ中町の質屋の娘御。ガお前是留て如何さんすへ。アイ。差出が間敷事ながら。貰はれぬ時宜ならば。與茂七樣。其米を買たが能いわいな。何を云てじややら。買にも金がない物。イヽエイナ其所に有其お錢。十四文で。買はしやんせ。ヤ此奴は充分わい。遣は質屋の娘程有て。兩方立る早算用。コリヤ與茂七よ。アノお娘の挨拶が面白い十四文に賣てこますぞ。ムヽ此錢で買て取ば。恩に被る事はない。賣しやるか。ヲヽ賣たと。地受取渡しの端錢論に成たる米俵。升屋の娘が計に寄

を納る。戀の緣十二因緣十四文。買たも賣たも男の立引。詞與茂七是で。中よしじやと。地臺詞の仕上。長田屋の。家居をへ指てぞ フシ歸りける。地暮る日に フシ營闇し。角行燈渇々燈す身の油。フシ光りは薄き妹背中。おかなは俱に手傳ふて與茂七が傍へ寄。詞眞にお前の爺樣は奥に寢てござるそふな。頃日は首尾が悪ふて。咄しさへする間がない。今改めて云てはないが。不圖お前が此方の内へ。雇はれて見へてから。地嶋樣始め内の衆正直なお人じやと。心一杯世話を勤近所へも引合せ。詞アノ此間から行しやんす長田屋と云所にも。娘御が有程に。コレナ。如何樣な事云てゞ有と。相人に成て下さんすな。地お前の誠な心を見込私が方から云掛て。斯した嬉しい中となり。明ても暮ても俤の。心をフシ離るゝ事はない。地離憚からず女夫じやと。云るゝ折を松の鶴。番離れぬ戀中を。コレ必ず變つて下さんすなと。思ひ亂るゝ初恪氣。心有丈搔口說。與茂七はフシ眞面目顔。詞譬惡い事にもせよ。一旦男の言た事。違へるのは己りや嫌ひじや。地口へ出しては得言ねど。お前の實な心ざし。嬉しうなふて何とせふ。餘所の娘が何の角のと。其樣な爵然とした事聞と。己りや顔が熱う成て脇の下から汗が出る。詞女房と云者は。一生に只た一人持物ぢやと聞て居る。エヽあれ藥が煎じ上つたと。立上るを。地フシ引止め。詞イヽエ藥はまだ上りやせぬ。アノ毎度の樣な事せぬのかへ。毎もの事とは何の事。エヽ斯するのじやと。地抱付。拍子に返る藥鍋。フシ灰も散々後の方。立出る鄕之助。二人は潑と詞なく。フシ身を震はして居たりける。詞ホヽ始終の樣子皆聞た。ヤモ驚くは尤ながら。互に若氣の事なれば又有るまい事でもない。コレおかな女郎。不思議の緣で躰が事。其處の家の世話に成。其日暮しの渡世の力。何時は禮にと思へ共老病の果しなさ。思はぬ不禮詞もなし。アノマア地仰しやります事はいな。何のお禮に及ぶ事。詞親御に隱して不義徒。定めてお腹が立ませふが。地與茂七樣に科はない皆私が大膽から。袖裾引て誘ふ水。地濡ては露の厭なく命に繫し中と成。那方の事は是限に。堪忍して上まして。フシ下さりませと涙聲。詞コレ娘女能聞しやれ。見る影もない此浪人。其方の身上とは釣合ぬ緣なれど。夫程思ひ詰た中。衣向から云入て與茂七と夫婦にする。

ガ取結び調ふ迄に。此方を内へ引込ては。此親仁が頬が立ぬ。サア早ふ内へ歸らしやれと。地事を解たる詞に諸き詞アイ私が親は嘘樣計。そふ打解て云さんすれば。何の角のはござりませぬ。地與茂七樣には何や角やまだ咄し度事も有。詞ヤア知ぬ内は兎も角も。我耳へ入てから。後暗事は成ぬ。聞入なくば斷然と。躬めと緣切ふか。アイ〳〵アイ。そんなら最歸ります。お詞に違ひなふ。早ふ祝言する樣に。ヲ、此方から云込迄は。敷居踏す事も成らぬ。サアサア早ふ逝つしやれ歸らしやれ。アイ。夫んなら與茂七樣後程と。地顔で知らせて立上り。地逝際惡き後髪。フシ心殘して立歸る。鄕之助戸を鎖寄。傍に氣を付無手と座し。詞コリヤ與茂七。アノ升屋を始め近所隣。浪人じや笑止やと。他人が情掛るのも。矢張夫がお主の影。是迄も云聞せし通り。御主人の大恩。苟も忘れはせまいな。めつそふな。夫忘れてたまる物か。御主樣の事ならば。命でも捨る此與茂七。ム、其性根なら其方に。云聞す事が有。地近ふ寄れと聲を頻め。詞鎌倉にござる亡君の御舍弟縫殿之助殿。首討つて出すべしと武將よりの仰。先君の片われなれば何卒お命助度。忠臣の者心を碎く。時に其方が其面相。弟御に似たる故。腹掻割て縫殿殿の。御身代に立よ。ヱ、。ヲ、身に過た大切の役目。ム、。其身代に成て死れば。私が手柄に成りますかへ、親へは孝。主へ忠。ム、心得ました。お身代に死ませふ。スリヤ聟命を捨るじやな。アイ。斯云たから違ひはない。唾吐事は嫌ひでごんす。ホ、出來た。常にも何角云聞せ置たれど。其方はまだ腹の切樣は得知まい。敎へて呉ふ。コリヤ丹田へ氣を納ると云てな。臍下下に氣を落付し。左の肋へぐつと突込。右へ〳〵と斯引廻せと。地扇で仕方。與茂七は目も放さず。詞ム、〳〵左へ突込。右の方へと遣のじやな。コリヤ仕損ふては大きな恥じや。如何したら宜らふと。地跡なき思案に立上り有合硯引寄て。墨哺ませる手習筆。腹に墨打フシ一文字。詞サテ親父樣。此墨の印で能かな。ヲ、其通と立上り。地蒲團の下より刀取出し。詞困窮不自由の此中でも。賣拂はぬ此一腰。地則ち銘は肥前の國吉二尺七寸。詞其方に呉る。潔ふ腹切てお役に立。地我は次へと一滴も。涙飜さぬ武士の親子の別れ無義道に。フシ見返りもせず入にける。地跡に與茂七件

の刀。手に取上て一人言。詞何でも此墨打の通り。斷然と腹切て。冥途にござるお主樣や。アノ親父樣に響られふぞ。濟られふぞ。ア、何とやら云しやつた。ヲ、夫々。丹田と云て。臍の下へ氣を落付。左へ突込右の方へ斯。ハア南無三。腹に邪が出來た。ヤ是では見當が知れぬ。炙卸した心持と。地立上つて行燈の油を指に墨打の。上へ滿分と塗付て。立派に死ふと思ふ氣に立たり。居たり我腹を眺入たる後の方。地毀れし壁より升屋の娘。申し〳〵に與茂七恟り。おかな樣か。詞如何して其所から出やんした。私やお前に逢たさに。裏道から忍んで來た。エ、今の樣に親父樣が。事僻て云しやるのに。又來るとは合點の悪い。イエ〳〵何程合點が悪ふても。逢ねばならぬ譯じやわいな。ム、其譯は如何した譯じや。アイ。私を殺して下さんせ。エ、。夫りや何を云のじや。お前は氣が違やせぬか。アイ氣も違ふ程の事。天滿の一家が云出して。私に露知さず。翌の晩聟が來ると。俄事の取結び。地忍んで聞より心も空。確と鎭て何氣なふ。隣の日待かこ付に。私しや内を拔て來た。お前に離れ何のマア。外へ嫁入する氣はない早ふ殺して〳〵と思ひ極めし顏色に。詞アヽ捋ちもない。其樣に澤山そふに命を捨て堪る物か。如何ぞ又仕樣が有ふ。マア今夜は逝んせ逝んせ。エ、夫りや餘り胴欲じや。地お前も死る身じやないか。詞ヤア。吾が死るとはめつそふな。ソリヤ如何して如何して。アレまだ其樣に隱してじや。地先刻にからアノ物置で親子御の物語り。死しやんす譯聞た。迚も此世に居ぬ私。一所に連て下さんせ。一期の別れも知さずに私を殺さぬお前の心。嬉しい樣で水臭。其譯聞て諸共に。死る覺悟で居ますると涙ながらに恨事。地與茂七は物をも云ず差伏向て居たりしが。詞ヲヽ左樣じや。望の通に只今。殺す〳〵吾も死る。シタガ夫では。お前と私と。心中に成ぞへ。死んだ跡で人が見たら。眞にマアあの娘は。見ともない前髮と。心中を仕居つたと。指さしして笑ひ居らふ。テモ鈍拍子なお染久松じやなア。エ、何云てじややら。笑ふても識られても。地お前と死る嬉しさを何に比て疊紙。懷櫛笥取出し。此世の名殘に其髮を。結直して上ませふ。詞アヽ是是。そんな緩りとした事じやない。サヽ、一刻も早ふ〳〵。そしたら責て亂髮。地撫付さしてと立上り鬢掻撫る櫛の

蔑に。掛る。涙の。水油寄つおさへつ髪筋の。元結際も後勝。心亂るゝ　フシ鐘の聲。詞アレ今鳴は夜半の鐘。後れて
に見苦しい。サ覺悟は能かと。地座をば組ば。フシおかなも。爰ぞと。用意せし。守り刀取出し。詞是は私が守り本
尊彫付て有双物。未來の苦患も安々と。地是で殺して下さんせ。ヲヽ合點と引拔て。今が別れと互の觀念。女を引寄
氷の刄。襟元に差付て。顏見合せば恩愛の遺。別れの苛しく。心も腕も弱り果。進兼てぞ見へにける。女は覺悟潔
く。詞與茂七樣後れまい。早ふ〳〵。ヲヽ心得た。南無阿彌陀佛と貫く刄。呿つと一聲斷末魔。地轉び出る郷之助。
二人が中を押隔。詞ヤア躰め。狼狽たか。儕にこれ死ぬと云たれ。此女を殺す狼狽者。親父樣。狼狽も後れもせぬ。
お身代の一大事。聞取た此女じやに由て。殺しました。私只今切腹と。地讓りの刀取直せばヤア躰死るに及ばぬと。
柄元押へる此方に力彌。郷之助聲勵まし。詞力彌殿。縫殿之助殿身代に。我躰を立んとは。親子が心引見ん爲の。僞り
でござらふがな。密事を聞たアノ女。手に掛て切腹する。躰めが此心底。由良之助殿の徒黨の人數に。最早お赦し下
されふか。ホヽ遠なる御子息の。心底を見る上は。只今より父由良之助が黨に加へ。隱家へ同道致さん。スリヤ。親
父樣の代に。血判お許し下さるゝか。ヤレ躰悦べ。ハヽ〳〵〳〵忝しと加藤親子。地今日待得たる優曇華の　フシ悦
び合ぞ健氣成。地與茂七嬉し涙を押拭ひ。詞是迄貧苦の其日暮し。お前の病氣介抱して。大星樣のお供せんと。夫計
りを樂しみに。町人共に雇はれて澤山そふに。何ふしおれ。斯しおれと。豆腐買に走つたり。灰吹川へ洗に往たり。
口惜い。無念な事。堪て居た甲斐が有て。お前の命の有中に。大星樣のお供するとは。モヽ〳〵〳〵嬉しうて〳〵。
吾りや涙が飜ますはいの。ヲヽまだ此上に百千の。辛勞辛苦も武士の常。お主の仇には親をも見殺し。高名手柄の眞
魁。地我一生の教訓を。心魂に貫いて。ちつ共忘れず萬一の時にはソレ。其腹の墨打をばナコリヤ潔ふ用に立い。所詮
餘命のない此親。草葉の影で悦ばふと病に屈せぬ忠義は鐵石。末の世迄も福嶋に　フシ殘る石碑ぞ。炳然。地郷之助躁
り寄。手負な膝に抱上。コレ此方が死だ計で躰が心底顯れて。元の武士に立歸り。譽を取た其上で。追付行て有ふ程

に嫁女。待て居てフシ遣て下されと。地云聲耳に今般の息。苦の氣に哼と吐。詞能嫁と云て下さりました。地舅御樣。此身は如何でも死る覺悟。與茂七樣が元の武士に成しやんすれば猶嬉しい。詞追付跡から見へるのは。氣掛りて私しや否じや。未來迄女夫なれば半座を分て待けれど。地千年も萬年も。隨分遲ふ見へるのは。私しや樂しみでござります。今一度お顏が見たけれど最何にも見へませぬと。跡は得言ず魂の緒の次第に細き苛しさ。與茂七始め人々もフシ涙呑込計りなり。地力彌重て心を付。詞勞しきは此女中死餡の納り如何せん。ホ此親父が腹搔割ば。跡の障少しもなし。併躬が首途せぬ中。味方に死するは則不吉。地嫁も息を引取ねば首途を見送る堅固の體。夜の明るに間も有るまじ。力彌殿の御供せよ。心後れな與茂七と。地諫めのフシ詞に立上り。詞住馴たる夜道の案内先拂ひ致さんと。地刀指込立出れば詞寡き大星も禮義正して門の口。地思ひも寄ぬ稻村より。駈出る定九郎。力彌を目掛切付るを。逆さぬ與茂七待つかせと。首筋摑んで戻り打せ。確と踏だる力足。眼飛出て七顚八倒。次手に讓りの試と。フシ只一刀に切倒せば。地父は戸口に力彌が勇。斧定九郎を討取たる。血祭りの手並の程。見られたか加藤殿。ホヽ切たりや與茂七。ヘヽア飛だりや目の玉。目出度首途と。地病苦忘れて高笑ひハヽヽヽ。痿ぬ聲も一期の紀念。立切戸口。世の別れ別れてこそは　三重へ出て行

第　六

繁昌はフシ地から涌出る和泉の國。堺の町の根生たる天河屋の義平迚。人も知たる町人の。頭と形も好頭に絹類は肌に着ね共。男一匹身上もフシ町一匹と見へにけり。地内には數多召使有が中にも丁稚の伊五。子の由松がお伽役。人形箱を引くりかへし。詞サア始りじや〳〵。信太妻の始り。爰に哀を止めしは。丁稚の伊五が身の上なり。詞畫は遊びに隙もなく。夜は宵から寢ふたふなり。時々に此坊主が。何ぞ吳〳〵と。責咤ば親が祇愛し。遣しやる菓子は。

何々ぞ。先一番は白雪糕。續いて落雁東山。扨又味い菓子なら有餅糖を先に立。地粕てら羊羹。小豆餅兎屋の饅頭抔どと云ふ。詞味い物を囓ふても。只我一人喰てしまい。已にちつ共喰さぬは。扨も哀な。次第なり。詞そんな人形廻し已りやいやじや。否じや。〳〵のやんちや聲。詞ヱ、コレ其樣に無理云ぬものじやわいの。惣體頃日は。内が鬱然鬱然と。此間來た飯焚のおかやを。且那樣が仕課るかしてお家樣が痛不滿。仕課りや腹が膨る道理。コリヤお家樣が尤。又飯焚なりやせしめるも理屈。尤と理屈と。ハア、何方の味方したらよからふと。阿房が。フシ靈す一人言。詞イヤ〳〵そふ水臭心なら。添て居て樂しみがない。暇の狀書てもらを。フシと云つゝ出る女房お園。續いて下女のかや佛。信ずる夫も俱に立出。詞ヲ、望なら去狀。何枚なりと書て遣ろと。地跡へは寄ぬ。フシ男のかうけ。詞ヲ、又書いて堪る物か。後共云ぬ。サ云貰はふと地稍腹立ち鼻の先。交睫かやが氣の毒顔。詞お家樣もマア端無い。何の夫程聲高に。お腹の立事がござりますぞいな。イヤ端ないとは慮外な。漸昨日今日來た。飯焚のおかや女郎。如何に夫の氣に入た迚。そふ踏付て貰ふまいぞ。ヲ、何のマア勿體ないお前樣を。踏付て能物でござりますか。踏付ぬ物が。はしたないとは何故云やつた。モウ何にも云事はない。私が爰の内を。出て行さへすりや事が濟サ、隙下さんせ義平殿。ヲ、遣共〳〵。女房は恰好着物に譬た物。汚垢付たを脱捨て。ドリヤ清潔と能のを着替ふと。地硯引寄爽然と。お極りのフシ三行半。詞それ持て出て行と。地投出せば女房が。潑とは思へど云掛り。詞夫ならお前。眞實私を去る氣かへ。ハテ此方から好まぬ其方の望じやないかい。ガ又。去狀書たら盆の水。元へ戻らぬ細言云な。儕を去こくつて仕廻ふたら。今日からの女房はおかや。サ、、、爰へおじや〳〵。ハイ〳〵。サ爰へおじやいの。まだ隙出さにやならぬ奴ら。コリヤ家内の者共。殘らす去ふ。ハイ地と手代下男。妙裃に至る迄。フシ殘らず一間を立出れば。詞コリヤ手代の庄右衞門爰へ來い。わりや昨日裏で何と云た。ヱ、。否さ下女のかやを且那が。藏の前輪に押付て。とはアリヤ何の事ちや。イヤ夫りや實盛の謠ごくどふめ。謠諷ふて居ては此方の内の間に合ぬ。隙遣る迅速と出て去

ふと。地言れて何と庄右衛門次は。詞久助汝も隙遣る。私には何科有て。何科とは掛口の悪い奴。此方の旦那は俄に唐人になられたかして。菩薩を信仰しらるゝとは何故云た。其義をお前へ誰が申しました。ア、大方菩薩が饒舌たな。儘よ。ぼさ云たのが悪かつたと。地小首傾け控へ居る。妙のおふじ。其方最少氣に入ぬ。マアそふ思ふて逝だが能と。地言れて是非も仲居のフシお杉。詞私が身分は如何せふへ。ヲ、われにも隙遣る。ホイ失敗た。ア、人の心は飛鳥川じやなア。昨日の淵は今日の瀬とは。小野の小町が臼挽歌。是から私等はお家樣附。申しお家樣。お氣遣ひなされますな。爰計に日は照まいし。マア内方へお歸りと。地手代が勸めに女房も座は立ながら今更に。剽な事して我子にも。別れにやならぬか悲しやと。思へば堰上る涙を止め。詞コレ由松。母は彼方へ逝程に。隨分健で居て給や。イヤ母樣が逝なら吾も逝ふと。地慕ふ子を。義平は引退。詞コリヤ阿房め。由松連て奥へ去うと。地追遣勇氣女氣の放れ兼るを下女手代。妙久三が伴ふて銘々手道具引旁。フシ親元指て立歸る。地跡におかやが氣の毒の。餘りて洩る涙聲。詞申し旦那樣。地此樣になされては。どふやら私とお前とが。詞ハテ何も云事はない。奥へいきや〳〵。地テモ私が心は濟ませぬ。内衆計がお家樣迄。詞ハテ扨何も斯も己が胸に有る事。構はずと奥へ往きやと。地無理に追遣フシ跡打眺。ヤレ〳〵。地是て清潔と心掛りも内證の。誂へし物持て來る時分と門を打眺め。待に程なく。鍛冶屋の缺唇弓師の亭主挑燈屋打連て内に入。詞コレハ義平樣お宿にござりますかと。地聞て義平は奥口見廻し。詞ホ能所へ皆の衆。サア〳〵是へ。ハイ〳〵〳〵。先日仰下されました兜の鉢五十鎖帷子五十。ハイ私は半弓十張箭百筋。私は雪洞挑燈十五張。出來揃ふた故持參致しましたと。地銘々代物差出せば。詞ホ、皆出精故早ふごんした。ガ細工に麁抹はないかな。數多ければ追々に改め見ん。先達ても申す通り。他言致せば銘々其國の難義と成。必口外無用ぞと。地念を入れば。詞イヤモ其義はもつ共お氣遣なされますな。極めの直段より二割増にお金は先へ取まする。浮雲仕事を香込からは銘々が身の上。何の外へ洩しませふ。地御用も有ば又お賴申ます。最お暇と打連て。フシ宿所へこそは歸りけ

り。地跡に義平は傍に氣を付。長持引出し物數を改入る表の方。姿は端手に身は輕き。お照を伴ひ足輕の平右衛門は鎌倉より。戻りの道中浮浪〳〵と旅の。調度を肩に掛。フシ天河屋の戸口に休らひ。詞コレ室の傾城蓬夜殿。今の名はお照女郎。道々も云ふ通り。何じや有ふと此平右衛門が女房と。合點か。成程合點でござんす。彌五郎様の心を見限り。身を投て死ふとしたを。思はずお前に止められ。サ、、、、何も云事はない。諸事はおれが呑込て居る。ヤ最爰が天河屋。頼ませふ〳〵。地の聲に悔り弓も兜も挑燈も。摑んでほり込長持の。錠前しやんと出迎ひ。詞ホ寺岡様。義平様。是は〳〵珍しいサ、、、先々。地是へに寺岡が。フシお照諸共内に入り。詞扨々義平様には何から角から申ませふやら。先御堅勝て大悦に存じます。お前様にも御機嫌で。お目出度ございます。扨躬由松義。其元様に達て御所望申し。私が養子と致せし處。仕合せと隨分息災で殊の外成人致し。夫婦共に悦びます。コレハ〳〵。二つの年から此方様へ遣せしからは。最早手前は音信不通。御夫婦の御寵愛は彼めが仕合せ。夫は格別義平様にも御存じられます通り。まだ籠城共殉死共。家中の評議定まらぬ中。御用の義に付拙者めは鎌倉表へ罷越。萬事御用を相調へ。直様國へ歸つて見れば。早本城を明渡し。諸家中は殘らず離散。南無三寶。其上御家老由良之助様の御行衛迚も知ざれば。方々と尋廻り。今日此方様へ參つたは。義平様には由良之助様とは格別の御懇意。若御存じの事も有んか。お知せに預り度。夫故推參仕ると。地聞て義平も打點頭。詞夫は近比御難義でござりませふ。お國許の開城の義は成程私も存てをります。ガ一家中の成行。由良之助様の始終。曾以て存ぜぬ私。併遠國へ迚もござるまい。マア〳〵私方に何日も〳〵御逗留なされて。緩々とお尋なされ。地長々の道中無お勞殊に女中も御同道。緩りとお休なされませと。フシ奥底もなき挨拶に。平右衛門が氣も落付。詞コレハ〳〵御深切の段近比以て忝い仕合。召連ましたは拙者が女房でござります。斯る大變でござれば。國元にも置れませず。女夫連の天竺浪人。萬事お世話をお頼上ます。コレハ〳〵御挨拶。サ、先々彼邊へござつてお休。地とフシ互の挨拶打和らぎし時も時。フシ女房園は。暇の狀取ても濟ぬ由松。

が。我を尋て今比は。泣ては居ぬか。可愛やと思へば引るゝ後髪悄々戻る我家の内。疵持足に越兼て窺ひ軒にフシイむ所へ。地本國の開城より定めなき身の神崎彌五郎。旅から旅の旅合羽。フシ此家へ來る門の口。地思はず見合す顔と顔。詞お前事は。神崎彌五郎樣ではござりませぬか。そふ仰しやるは義平殿の御内證お園殿。扨能所でお目に掛つた。拙者義も此方のお宅へ參る所。義平殿にはお宿にござるかな。ハイお宿にそふにござります。私はは去れましてござります。漸昨日今日來た下女に見替られ。子まで有中を。去れましてござりますと。地いふも腹立。涙なる。詞夫は近比氣の毒千萬。拙者もケ樣の所へ參り合。コリヤ聞捨にも致されまい。及ばすながら御挨拶申ませふ。ガ奉公人に見替られたと仰しやれば。其下女め憎い奴。何斯致さふ。其女めへの頻當に。其元を我等が女房に致したと申し。其後に挨拶致さふ。アイ〳〵兎角宜しうお頼申ます。お得心なら今より拙者が女房共。アイ此方の人義平殿じやない五彌郎樣と。地俄女夫の稽古やら馴るも早き。詞神崎彌五郎お見舞と。地ずつと這入ば主の義平。詞コレハ〳〵彌五郎樣。其後は御無沙汰計。何故の御來駕と。地堅い打太刀此方は柔。詞何故とは餘所〳〵しい。貴殿には御内室を改られしと承り夫故態々お悦びに參つた。夫れは近比忝い。ハア見ますればお連樣もござりますそふな。成程表に居りますはアリヤ拙者が妻でござります。ヲヽ左樣ならば猶以て。イヤ申し此方へお這入なされませと。地夫が詞は女房の耳に對て猶更に。這入れもせぬ闕の戸や。竦々這入顔見て恂り。詞ヤア那輩先刻に逝だ女房。アヽ申し〳〵麁相云しやんすな。女房は女房でも。今では神崎彌五郎樣の女房。アイ只た今門口で。嫁入した女房。ハテ手廻しの能事ノ。我等も今日迎へました妻。那方樣へお近付に致しませふ。女房共おかや。地〳〵と呼聲に。アイと返事も何氣なく。立出るおかやが顔。出合頭に平右衛門。詞ヤアわりや女房のお北じやないか。アヽコレ〳〵夫りや何を云しやんす。以前は以前。今は義平樣の女房かや。ハア、すりや。義平樣のお内儀に。アイ今日極めた天河屋の女房。ハテ夫はお目出度事のと。地云ふ中見遣彌五郎が。詞其處に居るはお照じやないか。アヽ必ず聊爾な事云しやんすな。

照は照ても今では足輕平右衞門樣の女房。ム、夫んなら我も。アイ變つた緣で。ハテ平右衞門の內儀じやよな。ハテ彌五郎樣の奧樣じやよな。ハテ義平樣の御內證じやよなと。地三人女房の交換。詞動悖挨拶は。贅云者が近付に。フシ質屋で合し如くなり。地お園は立て義平が傍。詞お前は〳〵。私が何程悋氣する迚。子迄有中を能も〳〵去しやんしたのと。地云をおかやが中押分。詞申しお前は彌五郎樣の奧樣じやないかいな。夫にマア人の男を澤山そふに。其方へ退て下さんせ。ム、人の男とはソリヤ誰か。アイ今日から改めて女房に成たりや。義平樣は慮外ながら私が男。ヲ、夫りやマア結構な事のと。地云ふ中お照は彌五郎が。傍に立寄。詞コレ性惡誰が赦して女房穿鑿。お前夫で濟かいなと。地寄添中をお園が隔。詞申しお前は平右衞門樣のお內儀樣じやないかいな。夫にマア人の男を澤山そふに。其方へ退て下さんせ。ム、夫たなら眞に彌五郎樣は。アイ門口で嫁入したれば。彌五郎樣は慮外ながら私が男。ヲ、夫りやマア結構な事。コレ〳〵平右衞門殿。此方樣は〳〵。科もない私を去て。每の間にやら美しいお內儀樣を能ぬつくりと。地持しやんしたのと。地恨掛るをお照が引退。詞お前は義平樣のお內儀樣じやないかいな。夫にマア人の男を澤山そふに。其方へ退て下さんせ。地と負ず劣らぬ鷸鴕返し。寥然一座。義平が引取。詞何處も彼處も新米女夫で和返す。まだ挨拶さへ碌〳〵に。取締のない女夫〳〵。急度固めの御酒一つ。サア〳〵奧へと。地主の勸め。然らば左樣と彌五郎寺岡。女房〳〵は擦々に背向る顏の振合せも。他生の緣か銘々の。夫々に引添て皆々奧へ入相の。鐘も幽に燈火の。一間の內に由松が。地年より敏い小机は七つ いろはにほつしりと物淋しさの小坐眠り。地嶋樣寢ふたい。最寢よふと。地頑是ない子の一人言。お北は立出。詞ヲ、夜迄手習か。寢ふたいが道理じや〳〵。ドレかゝが寢さして遣ましよと。地引寄ればイヤ〳〵〳〵。詞餘所の嶋は此方否じや。本のかゝ樣と抱れて寢たい。否じや。地否じと寄附ぬ。子は正直の神ならで。云ねば親とは知ぬ筈。二つの年から此內に子に貰なて丸六年。顏さへ見せぬ苛い親嫌ふも尤。フシ眞實の。地子で子に成ぬ鶯の縋るに甲斐も泣計。詞坊よかゝは爰に居ると。地お園が聲に泣

止む子。膝に卵る フシにこ〳〵笑顔。詞ヲ、道理じや〳〵。少の間でも居ねば尋ねる。此可愛い。大事な坊を。我儘顔に何じやの。コレ後連のおかや女郎。此方様が平右衛門殿の内儀なれば。夫んなら此子は。ム、聞へた。不通の證文で貰ふた此由松。男に去れて。身の立所がない儘に。此子をおとりに蹈込。能私を去しやつたの。何程去れても此由松は私が子。眞に〳〵自慢じやないが。其の發明さ其器用さ。誰が教ねどいろはの清書。何と見事で有ふがな。此様に育てた子を何の人手に掛さそふ。ノウ坊兒。地ねんねん轉ろと フシ抱て行。詞マア待たこりや何處へ。私が内へ連て逝ぬ。イヤそふは成ますまい。ハテ他人の入ざるお構。地其處退しやんせと振切袂。迫合け中へお照が駈出。詞コレナ其様に仕たら此子に蟲が出るはいな。何をマア迫合しやんす。サイナ彼の女子がナ。義平殿を寢取たから起る事。何の私が寢取ませふ。矢張義平様はお前の殿御。ソリヤ知た事。其方に教られいでも。わしや義平殿の女房じや。モ何所へも逝やせぬと。地強い顔でも。子を力。添乳の乳房。お照も フシ落付。詞ア、嬉しやどふやら男が元々へ戻りそふなと。地呟く後に。女房共〳〵と。呼は寺岡平右衛門。アイとお北が立寄ば。詞ア否此方様じやない。女房お照。今奥て云た通り。神崎が心底は此平右衛門が知て居る。サ元來其方の心底に曇りのないは身が證據。明合て互に元へ取戻すも今暫く。ナ女房。イヤサ女房。何にも云ずマア其方は先へ歸りやれ。義平殿の御内儀も奥へ行て御亭主に氣を付召れと心有る。夫の五音呑込妻。お照も暫し假の妻。小裾引上出て行。地跡先伺ひ平右衛門。長持の傍近く。錠前くわつしり打音の。聞へやせんと氣配り。目配り。難なく鐵物打碎き。蓋押明んとする所へ。義平駈出長持の上に撞さり。高胡坐。詞此りや平右殿何するのじや。ヲ、武士の落目の切取强盜。見遁せば其通り。妨ると手は見せぬぞ。ハ、、、武士の落目の盗ならまだしもと思ふが。大恩の主人を忘る、四足の足輕平右衛門。ム、主人の御恩を忘れたとは。ヲ、其證據はコレ此指札。高の師直飛脚と有道中の指札を。儕が荷物に指居からは。師直方へ裏がへつた心だな。此義平が内へ迄女房を入込せ。有事無い事嘆廻る。アノ犬侍いめが。イヤ又其筈でも有。高が手一合

の盛相侍。天河屋の義平が内。道具一つ箸かたし。一寸指でも差て見い。ホヽ面白。秤目で世を渡る。素町人の根性と。小身なれ共。武士の祿を喰ひ込だ魂は得知まい。ホヽ其魂見たいわい。見事見るか。ヲヽ見樣と。地退ぬ男氣侍氣フシ尻引裏げ立向ふ。一間に立聞女房と女房。詞聊爾せまい義平殿。平右衞門殿。地と引留るを。ヤア邪魔ひろぐなと踏飛し。飜然と拔ば氣もハア〳〵支止る糸車。足手纏と寄付ず。悠氣變じて銘々に夫の加勢も女業。紡の手裏劍滅多打。狙ひも夫々浮雲と。地双の下にフシ惜まぬ命。詞ヱヽ面倒なと一時に。地外へ拋出し跡びつしやり。押ど叩けど破れぬ戸口。屈かぬ高塀。ヱヽ何ぞ手掛りに成物干傳ひ。お北が機轉の下潛。見越の竹に體の鎭撓む。張弓自然。戸口の鴨居打外す。双を覆ふ神崎彌五郎。詞ヤア畜生の平右衞門を。貯ふは儕も二心じやな。町人の魂。已も一所に重切。地どつこいそふはと受流し打合際に平右衞門。伏たる由松引立出。詞手向ひすると此小躰。サアサア。地何とにさしもの義平。勇氣も挫け氣も潰然。詞ヤレ早まるな聊爾すな。手向ひせぬと双物をからり。地ヲヲ無有んと云つゝも。咽ぶえぐつと一抉。地ハツト計に義平が顚倒。二人の妻も取縋り軻て詞泣計。地得より窺ふ由良之助。徐々と フシ打通る。地姿に義平が又惋り。思ひ掛なき御來駕と壘に嘲付 フシ涙の風情。席を正して由良之助。詞思ひも寄らぬ由松が最期。御愁傷察し入。町人には例なき其元の義心を見込。頼置一條。自然何方より洩聞へ。熟湯鉛の責を受ても。ちつ共屈せぬ魂は見拔てあれ共今切結びし双の中。子の人質に勇氣の折しは。愛着でなく、未練でなく。矢張其義心厚き心から。地生ぬ中の義を思ふ。據なき大事の枷。其處を計つて只今の性根試し。後の禍を拂はんと。詞差殺した平右衞門の切先には。義理有忠あり恩愛あり。地是て彌、義平殿の實心顯れ。我黨の安堵。小身の平右衞門。町人の天河屋。揃ひも揃ふ忠臣義士。追付本意を達するも兩人の誠故。詞諸士に代て由良之助。一禮。申すとフシ有ければ。地コハ冥加なき御詞と。二人は五體を平伏て忝涙。堰敢ず。大星重て 詞神崎は我名代鎌倉へ下り。敵地の樣子告知す大切の役目。夜明ぬ内に發足の用意ハア、畏り奉る。何れも 地然らばと神崎彌五郎。

フシ別れて旅宿へ急ぎ行。地義平涙を押拭ひ。詞ヱヽ何方も〳〵大星様の。お目鏡に叶ふ程有て。ヱヽ失策のない純粋侍穢い町人の性根から。疑ひ過した最前の慮外。御免下され寺岡様。何の〳〵疑はゝは此方の覺悟。鎌倉より歸りの道中。高の師直飛脚と有差札さいて。巍然しう通る飛脚。科はなけれど師直風を吹し居るが忌々しさ。其飛脚めを只一討。放伐して仕舞ふて取た差札。反忠と疑ひ掛り。切付る侍勝り。此由松が。眞實の此方の子なら目の前で。責殺されても痿ぬ氣性。元の親の此寺岡へ義理計りで最前の氣後れ。萬一大事露顯せば。代官所へ召出され。由松共に責苦は治定。若其時に生さぬ中の。義理の後れが付ふかと。地餘りこなたの御心さしが忝さに。どふも生ては置れぬ躾。五年六年の御養育。詞犬に喰れたと思ふて。御了簡なされお園殿。ヤイ女房何めろ〳〵。忠義に死する侍の躾。ほへる手間で死骸。責てお世話を掛ぬ樣に。川へ成共捨て仕廻へと。地思ひ切たる侍の。覺悟にお園は聲を上。忠義とやらは知ねども。二つの年から是程に。生育る辛抱が義理や飾でなろかいな。産だ子よりも可愛物。譯も云ずに刺殺し。詞川へ流せの。捨いのと。地無理云計が侍か。思へば短い壽命迚。人に勝れて器用な生質。詞コレ此清書。昨日迄にいろはも上て。地今日からは數文字の。十にも足らいで死て行。本に筐に成たかと。養ひ母の愁歎を。骨身に眞身の母親はフシ寧そ。詞も泣噦。地長い別れに成はしか。地顔が見たさに奉公に。不潔未練な心から。地此年月のお禮さへ。云に甲斐なき最期やと。返らぬ悔み。男同士泣ぬ涙は中々に。干かぬ園に。北時雨由良もフシ感涙禁兼。地死骸是へと抱上。詞一つの命に二親の名を上る由松は。武士の手本の其手跡。地いろは假名の下の文字横に讀ば。詞とがなくしてしす。此子が命計でない。斯云由良之助を始め。連判徒黨の一家中は。地皆科なくて死する命。集る面々四十六人今一人の平右衛門早血判と。フシ差出すは。地連判ならで由松が書殘したる筐のいろは。瀑と計りに寺岡が心も濟しすの字の血判。詞ホヽ夫だ納る徒黨の面々人數も都合四十七人。いろはの文字も四十七。此假名手本に合印と是をなすならば。親子は一體義平殿。夜討の供に由松が。地忠義を頭に兜頭巾。冥途の先

陣科なくて生て歸らぬ誓の割符。詞ハア、有難い御計ひ。夜討の武具も今日出來。鎖帷子半弓手鑓。詞ホ、かけやを以て打碎くは。分相應の此足輕。其外に大星が今日計らず思ひ寄。最前二人の女が働き。忍ぶ足代物干の。柱の形は取も直さず長柄に仕込鎗梯子。コレ。詞此紡の手裏劍は。時に取ての早手燭。地雨戸を外す竹の弓。工夫に及ばす。眼前に忽開くフシ心の霞。詞寺岡義平が子を殺す。惡日變じて最上吉日。フシ重ねて再會早おさらば。詞寺岡來やれと。地諸事萬事納る藏の千石取。歡きの裏口。お目出度存じまするとと泣たさを笑ひに紛らす躾方。武士鑑鬢りなき月を殘して　三重、立出る。

第七

詞鎌倉の闇は尖き武者小路。高の師直が廣館。裏門通りの塀際に何か白砂高挑燈。番の侍時代り。守衛フシ嚴しく見へにける。地屋敷の方より歩み來る詰番の武士坂東八平。床几の前に腰を屈め。詞コレハ〳〵木輪九藏殿。御苦勞に存じます左平太樣此間より上京有しは彼鹽冶が家來大星由良之助都山科邊に隱れ居て。事を計ると聞し故。其吟味にお出なされた。此徒黨の者共が。最早此鎌倉へ入込て居よふも知ぬ。物見人立の所に氣を付。夜は往來を吟味せいと嚴しう仰付られた。其鹽冶の家來の名を一々手帳に付て。身共等も持て居る。其元も持てござるか。如何にも〳〵。覺へ憎い名じやに依て。判然と留置ました。何でも褒美に成事じやと毎時の得意の上燗屋にも。とつくりと賴で置た。必ずお失策成されなと。地申合せのフシ其折柄。地此方の道より藥賣。箱振擔聲高く。歌名藥よ〳〵。藥が有が召れぬか。丸子か有が召れぬか。腹もせふ。癪でもしよ。腹を苗字に胴右衞門。おなかを苗字に胴右衞門。お腹見しやるかやれ奇妙と。フシ喈りける。詞ナニ〳〵儕は腹胴右衞門と云奴。ソレ九藏殿今の手帳に慥有る名。見やつしやれ〳〵。身共が急度捕へて居ると。地云ふ中手帳繰返し。詞ヲ、有共〳〵原鄕右衞門。サア〳〵儕は鹽冶判官が家

來原郷衞門引縛つて御前へ引と。地力身返れば惚りし。詞是は強い人たがへ。今仰しやるのは原郷右衞門。私は腹胴右衞門。めつそふなお方で有はい。其マア原郷右衞門と云は何者でござります。ヲ、サ譯有て此方の旦那を。敵と狙ふ曲者共。ハテ扨高のお家を狙ふとは。餘程根太い根性じや。そふ云ふ根太い癖には。此所へ吸寄る秘傳の膏藥がござります。翌持て來て上ましよ。長居は恐れ妙藥。扨も奇妙な人違へ。此お二人の侍に貼る藥が頓とない。馬鹿一切の妙藥と。地笑ふてこそはフシ急ぎ行。地跡にうつそり顏見合せ。詞エ、あいつでもなかつたと。地つぶやき床几へ掛る折柄フシ上下着たる前髪姿。間がしげに歩み來る。跡から男が。ヲウイ〳〵。詞力彌樣〳〵。早い足では有はいと追付此方に二人の侍。取り圍んで待て〳〵〳〵。詞汝は力彌と云奴じやな。アイ私は力彌と申します。ソレ八平殿ぬかられな。帳面見るには及ばぬ。前髪じやと聞て居る。大星力彌に違ひはない。ヲ、合點じや引縛れと。地立掛れば二人は惚り。男は中へ分入て。詞ア、申〳〵。コリヤどふなされます。アレハ此方の太夫樣。曲手鞠の大名人。玉本力彌と申ます。お屋敷方へ座敷に往て。今逝るのでござりますと。地斷云ば坂東八平。猶も不審の眉を顰め。詞イヤ〳〵そう云ふ程合點が行ぬ。其方が名は何と云。アイ私は地を彈く三味線役。陀々八と申ます。ヲ、九藏が覺へて居る。齊竹森陀々八で有うがな。ハテ益體もない。ソリヤ人違へでござります。ホ、そしたら汝等覺ない。慥な證據を見せ居らふ。ハテ扨是は迷惑な。何を證據に見せませふぞ。コレ太夫樣如何せうぞ。ハテ彼方方の疑晴すは。藝者に違ひない事を。一曲してお目に掛ふ。ヲ、そふじや〳〵。申〳〵お前方。太夫樣の藝を見せるが。玉本力彌と云ふ證據。始めませうと風呂敷より。フシ手鞠取出してあてがへば。地太夫は身構へ押直れば。三味線取てすが垣や詞東西〳〵罷出ましたるは玉本力彌高うはござりますれど是よりお目見へを仕ります。先づ最初の曲手鞠は枝流し枝潛り。是を名付て玉傳ひと申します。手鞠の一曲所々は口上を以て御意に入れます。先は手元にお氣を付られませふ。ハリトウ〳〵。其處で潛るが玉傳ひ落が水玉瀧流し。横に捩るが川千鳥でござります。左右へ開くが大鷹小鷹。

升切草切宙返り。早めて〳〵。獅子の千丈嶽落し。地三味線止て手鞠とも フシ風呂敷に引包。詞是で此方の太夫様。曲手鞠の玉本力彌。何んと違ひはござるまい。サア太夫様早う往の。アイマア待て下んせと。地力彌は所體繕ふて。詞お前方も是が御縁に。又呼出してお呉れへ座敷計でないぞへ。私しや寢間も勤ると。地跡の御縁を引掛て。フシ打連立て歸りける。地二人は暫し物をも言ず。鞠果たる其折柄鹽治の家來神崎彌五郎。其身一人は鎌倉に。得より土地のフシ窺ひ役。地身を省したる上かんや。小腰屈て傍へ寄。詞コレハ〳〵お二人様お氣が盡けふ。おでんで一盃成されませと。地提荷を卸す床几の前。八平諸き。詞ヲヽ毎度の上燗能來た〳〵。其方は日外から皆馴染て。酒代も急々云ずに。心能懸で呉る。夫で取分鼎眞振。昨日其方に頼んだ事も。働いたれば褒美に成。コレ上燗。是程心安くすれど。其方が名を未聞ぬ。實名は何と云ふ。ハイ〳〵私が内は煮賣の餅屋。其處で小豆屋の善哉兵衛と申します。ハテ扨長い名じやなア。シテ今の手掛りは。サア大切な事なればと。地傍に氣を付小聲に成。詞今朝此武者小路。西の廣野の芝の上に。數十人群居る人。合點行じと上燗の。商ひに事寄て。始終の様子を伺ひ聞。ホヽ夫こそは能手掛り。シテ様子は何と〳〵。サ其中にも逞しい。強そうな奴が出て。敵討の勝負じやと罵たるこそ天の與へ。詞を飾色色と。上手ごかしに取入て。夫は不了簡。師直様の屋敷には。お前方二人を始め。數多の手利が有よつて。中々及び色ぬ事。押寄て恥搔ふより。止に仕たが上分別其代には。アノお屋敷から路錢として一人前に錢五百宛貰ふて遣ろ。吾が了簡に付しやれ。勝て甲の緒を締ふより。五百の錢を占さしやれと。理解を說て聞したれば。遉に淋しき浪人腹。兵粮に盡たと見へて。漸に得心して。皆本國へ逝る筈。斯云事を働いた。此上燗へ御褒美は。錢も銀も入ませぬ。部屋〳〵へ商ひ仕に這入様に。お屋敷出入の提札を。御意に掛られ下されと。地云ば八平打諾き。詞約束の通り出入の提札。褒美に遣るは安い事。其殘黨の面々は。何卒連て來て呉るか。サア滿分と云聞せ。控へさして置ました。一走り行て呼て參るが今の路錢の五百宛は。ヲヽ夫りや物頭へそふ申て。吾が今取て來る。其間に其方は急ぎ。殘黨共を

連て來い。然らば左樣致しませう。シタガ此徒黨の者共。皆手强い奴等じや程に。必竟相仰しやるなと。地一杯食て出入札。褒美に貰ふ工とは。知らぬ八平上燗と フシ引別れてぞ急ぎ行。地跡に九藏も身繕ひ。手强い奴等に出合のに。引を取ては成らぬぞと。固唾を呑で待間もなく。上燗屋は先に立。鹽冶身内の殘黨と。連立出る其人柄。見るから似せの雇人と。鑑板打た フシ不人體。地屋敷の方より坂東八平。鳥目弁に出入札取揃へて出向ひ。九藏も俱に爰大事と兩人威義を紛しける。殘黨の人々は物をも言ず居並べば。上燗屋子細氣に。坂東八平樣木輪九藏樣。御兩人へ申上ます。是成傍は最前中た伯州鹽冶の一家中。御覽じませ衣裝も一樣にお揃へ成つて。既に斯よと見へし所を。此上かん屋が挨拶で。敵討を止て貰ひ。五百宛の路錢を差上。今日より歸國の筈。先お引合せ致しませう。一番目に御座りますが原郷右衞門樣。二番目が竹森喜多八樣。三番目が羽間重太郎樣。扨其次なは。國許計にござなされて。御當地始めての横川三平樣。又其次が織部彌惣次樣。一番跡に直らせ給ふが。此御仲間の統領武勇新なる。大星由良助樣でござる。近う寄て親懇におなりなされませ。アノ堅い顏付を御覽じませ。座の樣に見へるのは。皆智惠の噴出た塊り鼻の下のお長いのが。緩然鈍然貴人の相と。地名乘ば面々顏見合せ。詞ヱ、無念なと一同に。地差伏向たる有樣は。かげ。子屋店の引合せ。フシ關東屋とも云つべし。地八平九藏は詞なく。只宜しふと上燗屋。頼めば錢を取出して。面面の膝下へ。五百文づゝ差出し。詞ア、此上燗屋が申事。お聞入下されて。本國へお歸り有ば。兩爲と申す物。俱に天を戴ずと。思ひ詰たる傍が。五百の錢を載かしやるは。お勞しふは存れど。只錢設のない時節と。思ひ諦め給へかしと。地打萎れて申にぞ。竹森喜多八聲を掛。詞お頭大星由良之助殿。コリヤ此なまを手まゑふかと。地裏問へば由良之助。せめて一束かと思ふたら 漸五百はせくちけれど。仕方がないと五百文。地懷へ フシ押込ば。銘々錢を取納め。サア散ふと立上れば。上かん屋引取て。詞是から私が國境迄。迎もの事に送ります。お約束の御褒美と。地云ば八平打諾き。詞適れ働き上燗屋。出入の札と差出せば。地忝しと押戴き。詞イザ大星樣よりお出あれと。地似て

も似付ぬあぶせ者。先に押立上燗屋。打連立て　フシ急ぎ行。　地二人は跡を見送〳〵。　詞扨々是で氣が休まつた。最前委細を申したれば。物頭が云るゝには最早番も今夜限に。翌から止いと有事じや。祝ひ事には幸と上燗が置て逝だ。酒田樂を取出して。落索に呑掛ふか。　地ヲヽ能らふと兩人が。打寛し床几の上。献つ押へつ酒事の。時刻も。夜半過がてにお部屋廻りの歌比丘尼。色賣夜半はびんざさら。其音さへも。音を入て。端手な取形　フシ密々と。　地屋敷を目掛歩み寄。八平目早く。　詞ソリヤ色すめが出て來居つた。爰へ〳〵と。　地手を取て繾情聲。九藏も餘程赤面して。詞扨々まんがちな八平殿。コリヤ色よ。爰へ來いと。　地二人が引張千鳥のていくはん。　詞お前方留る氣なら。何方成と極て下んせ。ヲヽサ〳〵夕部は我等が後詰したから。今夜は急度先陣だ。サテ君おじやと。　地手を引て。寢間は毎度のアノ番屋。待兼山の時鳥。鳴て吳よと　戯て。番屋の内へ　フシ引立入。　地跡に九藏は　フシきよろりくはん。テモ苛い目に合せたと。やゝ腹立に茶碗酒。引掛〳〵待兼る。心淋しき夜嵐の。更渡りては身にしむ思ひ。ふしぎや件の番小屋に。霞覆ふと見へけるか忽蒲團の如くなり。八平は其上に。鳥威を抱しめ。餘念多猥の睦言に。比丘尼と見へしは此屋敷に。年を重し古狸。番屋と思ふは八疊敷。鼻毛延させ　フシ樂しみ居る。　地九藏も心は夢現。性根奪はれ己が目に。矢張番屋と心得て戸口。差寄　フシ耳を付。　詞エヽていくはんめがほへおる〳〵。待して置て胴欲じやと。地戸を引開る心にて。正體もなく諸共に。睾丸の上へつと乘。　詞ヤイ〳〵八平。近年の長床じやと互に引張鳥威。此方へ引彼方へ取。更にたはいはなかりける。狸は己が思ふ儘。欺して濟して嬉氣に。悦ぶ形腹鼓。拍子可笑鳴渡り。我住藪へ歸らんと。　詞段々睾を締付れば。コリヤ何じや甚暗ふ成たわい。ヤアそう云ふは八平か。ていくはんは何處に居る。何やら氣味が惡成た。出樣とすれど出られぬ。歩行ば足がにつちやりにちやくちや。去とは臭い惡臭成た。中で動搖を猶引締。締つ緩めつ腹鼓。　地我往方へと　三重へ連歸る

第八

地皷の大事は三つ地に有り裏表有を士と云ふ。兵法一百八十手逃るを以て第一とす。酒色財三を貴ぶと譯なし事を書散す。フシ反古障子の樂書は。大星由良之助良金が。身の置所山科より木屋町。邊の借座敷。子息力彌は小皷に武藝馬藝は何時かに。棚に揚はま碁將棊に。送る月日の光りさへ。恥と人目に長月の。フシ秋の日早く傾けり。地夫の爲めに妻櫛も。遁神崎彌五郎に連添心弓張の。お照は爰に營へ。詞申し力彌樣。一昨日お國よりお登りなされし母御樣祖母樣。一つ座敷に御座なされど染々とのお話しもなし。晝は碁將棊皷の稽古。お二人のお心にも如何と思召も氣の毒。私迚も女ながら。神崎彌五郎が女房。地夫に連添ふ心は一つ。何卒敵師直をと。云ふを打消し由良之助。詞ハテ扨女の小指出た。侍の言事聞果つて。敵抔とは何の事。コリヤ。力彌も能う心得よ。借座敷の徒然に。書汚した樂書。轉業ながら能味へば。諸藝萬事の心掛。お身が打小皷も。手の廻る任せに樣々の曲は誰も打。何事もない三つ地が一番打悪い。碁に切手なし將棊に詰なし。詰ふと指は下手の將棊。詰られまいと立廻るが大事の口傳。裏表なきを士とは大きな取違へ。啞を能吐のが誠の士。兵法は逃るが奥の手。緩慢怠惰で長生するのが人の肝心。只世の中は酒と色と金銀と。此三より大切な物はない。敵討などゝ云事。マア當世の捨り物。此心入で一番打ふか。地碁盤爰へと黒白の。フシ心分たぬ大星に。お照が胸の目算違ひ。フシ詞投首立て行。詞サア幾個で五つでか。夫でも成まい。今一つ置て六の花。謠山寺のや。春の夕暮來見れば。入相のフシ鐘。荻の聲。裏の障子を押開て。由良之助の奥方突然と立出。詞謠の聲碁石の音。隣座敷へ響きます。私は夫婦の中。お最愛やお袋樣。遙々お供申せしも。地其許樣の腰が拔。お主の敵は打忘れ盤上亂舞の遊び事。弓矢の道は捨りしと一門中の腹立。詞此意見の爲計。國元の老母女房が。頃日登つた早々から。地親子碁盤で阿房氣な山寺所じや有まい事。詞過分の知行を給り。鹽冶判官の執權と敬はれ。

三千騎五千騎の諸士の上に立。國中を醜しは。殿様の御恩ならざるや。地其敵を生て置御命日の精進も。御回向も寺參りも。何爲に佛が受給はん。御恩は何で報ぜんとや。詞ヤイ力彌め躰め。父こそ腰が拔ふずれ。母が腹を借たぞよ。地何故父御前に意見はせぬ。家に爭ふ子なければ家治らずと云事を。常に云ふたが忘れたか。詞儕が二歳の秋の末。有難や殿様の。御膝の上に抱上られ。親に劣らぬ人相あり。成人して忠孝なせと。力彌とは殿様の。お着せなされし。フシ烏帽子ぞや。地其時に勿體なや稚い者の習ひ迚。殿のお膝を濡せしを。詞却て殿には御機嫌能。出來した〳〵。主の膝を憚からぬ。其心では百萬騎の。敵を敵とも思ふまいと。フシ御感の詞を常々に。云聞したを忘れはせまい。人でなしの爺親は忘れても。詞此母は寢ても起ても主君の御恩暫時も忘れはせぬ。地庭に飼ふ犬迄も主の仇には嚙付ぞや。佩た刀は假粧か伊達か。左程敵が怖いかいつ迄命が生たいぞ。臆病者比興者。何の因果に腰拔を。子に持たぞと聲を上。前後不覺に。泣居たる恨の。フシ程ぞ道理なる。地力彌はうつふき返答せず。詞由良之助色を更。ヤア　詞口上ばるな女め。主の敵を得討いで。恥をかいても身共が恥。酒宴遊興長生して。樂しみも身が樂。人を雇ふ事でない。譽られて死ふより。譏られて生たが德。一門も緣者も他見八目。傍からは言能物。力彌に向つて惡口。我子には言れふが。夫には言れまい。サア云れふば云て見よと。地聲も荒くなる所へ。母は奥より走り出て。詞ヲヽ夫には云惡く。我子には云能な。夫んなら其方は吾輩が子。其方に云ふは此母。去ながら口では云ぬ。犬同然の畜生は。礫に思ひ知らせんと。地碁笥なる石を引摑掻摑。目鼻も分ず班り〳〵と投付〳〵。散々に投かけて哮と泣出し。詞嘲奥。其許も元は他人なり。アノ様な子を持て。そなたの心が恥しい。何にも云やるな云まいぞ。サア　地こなたへと手を引て。涙ながらに立て入。遣に武士の嫁姑例なふこそ　フシ聞へけれ。地大鶯文吾竹森喜多八。敵の様子聞繕ひ毎日爰に木屋町筋。　フシ案内に及ばず入來れば。地爰へ〳〵と親子は密々。兼て心は間の戸障子差寄て。詞扨御發足の日限は。サレバ〳〵。先達て鎌倉へ遣せし。神崎矢間なんどが方より。毎日の催促。我も心は逸はり共。今少し

心に叶はぬ事有つて發足延引。ハア其義も御尤に存れ共。隱すとはすれ共多人數の事なれば。期が延る程洩聞へ。用心に用心を重ねさしては。一向に志しも無益にならん。ノウ喜多八。左樣〳〵。イヤ最此上は一時も早いが勝。サアお心を決せられ。地下さるべしと混に。云ど大星默然と。返事思案に暮近く。西日映入赤前垂。祇園の仲居詰袖のフシ藝子交りに。大星が内を。覗て婆娑と。戸口から一寸と招けば由良之助。詞早い〳〵。マア〳〵〳〵待々々と。地云ふ程苛つ太鴛竹森。詞イヤサ何日迄待のてござる。最ふ〳〵日々に師直が。威勢の募る咄しを聞て。どふも虫が堪忍致さぬ。サ、、、尤々。尤もながら其處の事。由良之助が了簡は。百發百中の謀を廻らし。時を待て打立所存。譬て云はゞ十の梯子を。まだ七つ過暮六つから。追付行〳〵。ナニ今宵暮六つに御出立とや。其お詞を待兼ました。ササ然らばイザ御用意。ハテ扨々々。六は陰數軍に不吉。まだ今や抔行れぬ〳〵。マア一月も待たが宜と。地云へば門には興冷し。詞扨つても强い驕まし樣。コリヤ此方から用意しておだてずばお出まい。地寧大勢連立て後に。斯々諸き合。鼻歌交り塗下駄の。音も色めきフシ立歸る。地跡には二人眉に皺。心を碎く表の方。西國武士の供廻り乘物しと〳〵音すれば。人こそ來れ執れも暫し。彼方の間で内談有れ。ハツト三人打連て次の間へフシ立門に立。地乘物付の若黨が小腰屈て。詞賴みませふ大星由良之助樣御旅宿と見受。壹岐の國主より使者として。家老廣嶋源五左衞門罷越。御對面下さるべしと云入れば。ム、ハテ珍らしい音信。如何にも由良之助在宿致す。壹岐の御使者源五左衞門殿。お通りなされと申しやれ。地アツト答の戸を押明。立出る源五左衞門十か九つ蕞爾の。剃下天窓の愛らしき遺大家の家老職。跡に引添若黨佐五兵衞。乘物下部は旅宿へと。差圖にフシ皆々立て行。地互に一禮三つ指にて。詞久々貴意得ませず。由良之助殿にも御健勝に御入なされ。珍重に存じまするとも。地大人然たる武家挨拶。由良之助打微笑。詞ヲ、壹岐の御家老御成人で珍重。ナニ佐五兵衞も堅固で目出度。元來主人鹽冶樣と。石堂樣とは親しい御一家。其家老の先源五左衞門殿。急病にて跡目なき故。身が躰の此吉次郎。所望に依て養子に遣し。幼少ながら二代の源五左衞門になさ

れ。二千石の知行頂戴。此親や兄の力彌には。生れ勝つた身の果報。嘸お手前達の世話て有ふ。ヤ是は内證御使者の趣仰聞られよと　地有ければ。詞主人申越まするは。其方殿主人鹽冶殿不慮の生害。其時の腹切刀。石堂達て乞受先達て早野勘平に渡し。其方の手に渡り有る筈。矢張其元に有か無か。此御返答承つて歸れとの御事と。地辨舌爽然二葉より　フシ誠に親の子なりけり。地父も暫く思案の體。詞ム丶如何にも其九寸五分。一旦身が手に入たれど。マア言ば不吉な刀。捨られもせず難義致した。夫を今更詮議して。石堂樣には何に成る丶。イヤ〳〵申し。近比憚りながら佐五兵衞が存じまするは。此御口上は深いお心の有そふな事。其腹切刀は。石堂樣が役人中へ達て所望遊ばされ。由良之助樣へ遣された心は。其刀を以て主人の仇を。コレ〳〵佐五兵衞。ム丶若夫なれば石堂樣の强い無分別。主人の鹽冶樣の切腹は。我てに成れた身の誤り。畢竟御自身の短氣が敵。其外に敵はない。何の益に立ぬ九寸五分。此方に置ても邪魔に成から。古道具屋呼んで夙に賣拂ふて仕舞たはい。ヱ丶。然すれば敵をお討なさる丶お心は。ござりませぬか。ハア。是非に及ばぬ。旦那お覺悟遊ばしませ。ヲ丶覺悟は極めて居るはいやい。ヲ丶能ふ仰しやつたのふ。申し由良之助樣。眞實其お心なれば。此お子は腹成れにや成ませぬ。只さへ人の惡說。由良殿は腰が拔たと取沙汰が殿のお耳へ入。九寸五分の返答とは。敵を討氣が有か無か。若無れば。臆病武士の血を分た躰。此方の家老の家繼すは穢れ。再び歸るなとの御詰お少ふても侍。痛はしながら御切腹さしませねば。叶はぬ手詰。返答火急に聞切て。早速國へ知らせよと。相役が旅宿迄來て居らるゝ。返事は今夜の夜半迄。何卒此お子の御無事で國へ。お歸り成る丶能御了簡。地お聞し成れて下さりませ。詞一昨年から私を。べいよ〳〵とお廻し成る丶私じや此お子がお最愛ぼうで成ませぬ。申し〳〵大星樣。御思案をお仕換成されて下されませ　地と云ふ聲も咽に詰らす。フシ正直涙。地一間に立聞お石が思。我子の健氣を見るに付。出るに出られず夫の心。神佛が入交り忠臣に成て給と。願ふ愁氣は由良の戸に。心ぐれつく丸太船。いなせの返事待兼て參らせ揃ふ迎ひの茶屋駕籠。仲居が先へ旦那樣遲ひ。一寸お出

い。フシ媚く聲。詞ヲ、そふ有ふと思ふて居た。直に此儘ドレ行ふと。地閑て恟り申〳〵。詞只今のお返事を。ハテ。返事は最前して置た。モウ用はないと振切て。地竹興に飜然と移氣な。客を囃して祇園町〳〵跨げじやハイ〳〵吹送る風に。取れて跡白浪。ハツト吐息諸共に。お石も絶兼轉び出我子に取付。咽び泣。大鷲竹森走り出。詞イヤ最空氣に入た穿鑿。心得ぬと存るから。御内室はお袋を。態々國へ呼に遣し。意見の爲と思ひの外。結句場晴たアノ益體。彌腰が拔切たな。サイナ。お前方の手前も連添身で面目ない。母御より女房より。可愛我子の生死さへ。目に掛からぬは天魔の見入か。地久し振で大きふ成て。能戻つたと云ぬ先に。殺さにやならぬ樣に成。彼樣な親御の血を分て能此樣な子が産れたと。思ふ程猶苛らしいと口說立れば二人の義士。詞モウ所詮はない大星を。打放して刺違へん。地實に尤と駈出す。詞ノウ待て下さりませと。地泣々お照が袂より。詞只た今此狀が。御寢所に落てござりました。宛名のない封じ文。地由良樣のお手なれば。何ぞ深い樣子かな。詞マア披いて御覽じませ。ム、何方へか遣さんと。認めて置れし物。地若やと封じ目切解。披けは中は假名交り。詞態と申入ル〳〵。兼ねて契約の通り。彌明晩夜討に押寄申べく候。萬事手筈ぬかりなく賴入候。如何樣の事有共本望遂申す所存に御座候。尤も彼君を大將にて。其外十人計御揚下さるべく候。賸は貳匁五分賸。二十人前にて宜敷候。牽頭法師藝子。合せて十二三人。呶と鳴込大立〳〵ヱヽ馬鹿らしいと狀打付。地互に顏を見合せて。此心底とは知らずして。賴に思ふて待暮した。此人の心が碎け。詞最ふ本望は遂られぬ。地最早此子の命の切め。詞お石樣。佐五兵衞。地思ひ廻せば廻す程。果報拙や可愛やと。抱占たる親と子の。別れは夜半の鐘限り。短い壽命止めても忍び兼たる憂涙一度に哮と臥しづむ。詞リヤン。スムユ。ゴウサイ。チエイ。ヲツトよし〳〵一つ上つてお銚子じやぞへ。アイ。地返事フシ取々祇園町。酒の湊に由良之助藝子女郎が取卷て。詞といましよ〳〵。とはしやれ〳〵。お客に取ては。珍客失脚新客飛脚。仲居は〳〵。銅厨番によはるぞ。新造は〳〵。赤松樣に掛つてじや。藝子は〳〵。さい〳〵生ます。惡口云まい赤子は〳〵。ソレ詰つて赤子は〳〵。

ポヘン〳〵。ヲヽ可笑夫りや何じやいな。ハテ是りや唐の赤子の泣聲じやはい。ハヽヽヽ詰つた〳〵。サヽヽ酒じや〳〵。地と隣座敷。何の遠慮の嫋竹にフシ持れ掛れば。地座頭が勃と。詞コリヤ盲め如何するのぢや。イヤ盲の口から盲とは出かした坊主一盃呑と。地無理に手を取引立れば。詞エヽ夫が盲じやはい。吾等が座を持がす座頭じやないぞよ。ホンニ申しめつそふな。那方は隣座敷のお客樣が。連てお出た辨慶樣でござります。未辨慶と吐す。吾や客じやはい。ハテ扨は貴樣客僧か。お名は何と。忝くも鎌倉に隱れもない。大名か。イヤサ大名からも公家からも。祝義は何方でも受る。岩井勾當と云ふ座頭。ムヽ夫なら。地江戸三界から來られた。詞お客じやの。左樣とは知いで麁相申した。御坊誤り奉る。コレ〳〵御了簡〳〵。イヤ誤つたで濟かいと。地邪かゝるを。左平太聲掛け。詞コリヤ〳〵坊主最點止さ。イヤ此法師は拙者が連。京地不案内の不骨者。無禮は互。最前から見申すに。萬事虫を死して墻忍なさるゝ大丈夫。左樣なふては大星由良之助殿とは云れぬ。アヽ見事〳〵。南無三本名顯はれた。實は我等大坂でいんつう澤の町人じやと云ふて立て居るじや。所へ浪人じやと云と。强い茶屋の受けが違ふて。エヽ時にと。只今お譽のお詞に預つたが扨。此堪忍をせねば。大望成就がなりにくいの。ムヽ左こそ〳〵シテ〳〵其元の大望とは。サア他言は御無用。拙者が望と申すは。彼奴受出して。此祇園町で茶屋を致す了簡じやて。如何じや有ふ〳〵。アノ武士を捨てや。アヽ武士は夙から捨て有はいの。侍に倦じ果て。算盤に掛つて見たれど。常の商賣は。大體の根では續かぬ。當所へ這入て見た所が。凡世界の天上。迚もなら茶屋に成らねば本粹にはなられぬと。凝掛たも有やうは。此色めが勸め。ノウ床。何處に私が其樣な事咥ばつかり。夫なら證人は此朝野。嫌んわたしや遂ぞ其樣な事。地存じませぬと フシよしばめば。詞あゝ云所が命の靨。委細は妻に滿分と。コレ〳〵〳〵。地お聞なされ〳〵〳〵と餘念なさ。ムム　詞茶屋の御亭主へ勾當が盃致さふ一つ注々。誠に最前の中直り。押へこなしにこりやマア給ふ。地ソレト投遣る盃の。雫は顔に　詞ヲツト直に頂戴涙と仕ると。地拭ふてきよろり何氣なく。詞ハア微溫燗で虫に障つた。茶出

して一森入て來い。御免〳〵　地と肘枕何所らと知れぬたはいなさ。地佐平太熟々。コレ由良殿。詞其武士を捨た性根で一腰は伊達に佩のか。ヤ夫程は表の看板。浪人の後入ぬ物と賣喰に致した。所が大小以上十七腰下された。扨咽にも立ぬ物。面目ないが賣殘りが只た此一腰。爰にないは何所へ遣つた。ハイ爰にござります。ヱ、おとはめ惡い奴。コリヤ〳〵〳〵轉業すなコレ怪我するぞ〳〵。ナニ眞赤に錆て有そへ。サ、、、夫を云ふ事かいやい。イヤ何程。刄物は錆て有ても。古主鹽冶判官殿の。敵を打氣がなふて叶はぬ。サ、、其事じや。浪人の馬鹿者共が義者張て。唐の唐人の引事を云出して。晉の豫讓の曳の山の。元家老役の拙者。宛然否とも云れず。せふ事なしの思ひ付。コレ〳〵是御覽なされ。主人鹽冶判官殿の石塔の下繪。堅空院隨毛理顯大居士。此石碑で諸事の言譯。此石塔を立る迄は。敵討はマア待々と繼延す中には。二人減三人退。段々義士がなふなる。其間には師直殿も年の上。餓でも喰て轉りと逝かれたら。夫幸にヱ、無念やなアと能顏して濟す思案。何と計畧も有ば有物か。サア御坊一つ參れ。イ、ヤ繼目じや。コレ〳〵此茶碗で改めて一つ。コレ申し貴方は大分過て有ると。地云程猶も意地惡ふ。詞イヤ〳〵呑す。おれが酌する。ドレ此方へと。地無理に捻付注ぐ茶碗。詞ホ此酒は能い端香。何じや端香じや。ヲ、可笑其燗鍋は酒じやない。南無三茶出しと取違へたと。地腹立紛れに衝突と口の惡さに　フシ齷土瓶。詞法師樣お前の酌は此朝野。是りや心意氣忝ないは。御坊少し差合なれど進上申す鮪肴。其吸着のが我等が好物。只一口に是りや堅い。堅い筈じや夫りや土瓶の口じやはいな。ヱ、阿房らしい能い〳〵蛸の代に此藝子今夜おれが抱て寢るぞ。是りや宜ろ。シタガ。此座に女子は四人御坊は一人。片身恨みのない樣に。天道任せに揉闘して。長いを取たが御坊の相方。地サア來いと引裂紙。ア、　詞是由良殿。夫りや只今の。眞に石碑を破つて退た。地是は仕たりの。眞中へ。詞左州樣へ上ましてと。地此御狀をと　フシ差出す詞何じやの〳〵。イヤ是は少々。ヱ、色の御文じやな。見せ腐らぬは憎いな。ア、儘に仕いと地緣側に轉りとたはひ。仲居共。閨の世話やき御寢なつて。判然公事が捌けたと。フシ皆々奥へ逃て行。地佐平太傍

に目を配。寢息を窺ひ能々と。足を潜て座頭が耳。詞コリヤ合點か。身は急用事で立歸る。アノ體なれば腰拔に極つたれど念に念。隨分氣を付告知らせと。地毒を吹込高の左平太笑坪に。フシ入て出て行　地醉た振にて空寢入。見るとは知らぬ計が佛。虵の目繰貫曲智惠。詞由良樣〳〵。サヽ起て今一つ。是々と。地脚で起して扨ても戯意。詞頓と氣遣ひない代物。落付山の時鳥。地氣骨折ずとお山か鼈子か一疋占て寢てこまそ。美味ぞ〳〵。伽羅〳〵こん羅伽げらげら笑ひ。フシ勇んで奥へ行跡に。地鼈子女郎が醜々小裾。詞由良さん未だ寢てかいな。どれ二人して擽り起そか。イヤ夫よりは目覺しの。時計の代りに二挺の三味線。耳に突付くはん〳〵〳〵。ヲツト夙から起て居るぞ。ヲヽ、負をしみ。然らば次手に連彈を承はらふ。何彈じやへ妹背川が宜らふか。可愛らしい物じやな。まだ坐眠りかいな。ヲヽ、聞て居る〳〵。歌聞て入るさの障子より。洩出る。月は冴れど胸の闇。子を捨る。藪に生立村鴉。父よ母よと泣鳥。詞ハア最ふ何時じや。追付後が鳴ませう。ム、夜中。大方今比はと。地思ひ遣たる我子の知死期。胸に。答へて班々〻と。歌倶に亂るゝ親心。鴛鴦の片羽の惘然と。子に迷ひ行。小夜千鳥。地露の命の露の間を。お照はフシ茶屋の庭前へ。詞申し〳〵由良之助樣と。地言ふ顔一寸と。詞コリヤ〳〵〳〵聞に及ばぬ。戻れと云使じやな。譬百度使が來ても。逝期が來ねば何時迄も居續。何にもな。いね〳〵〳〵と。地何所へ取付嶋迚も。涙班々。詞ニレ申し。夫りや餘まりお氣强い。地現在の子のお腹切すを。詞ヤイ〳〵〳〵夫りや何じや。此面白い遊びの中でめろ〳〵と。ヱヽ、聞へた。是りや臺所で呑だな〳〵。イヤサ酒呑だな。彼奴酒呑と泣上戸で。十年前の事迄繰出して泣が癖。くだまいてさま〴〵の事をハヽヽヽヽ。爰に居る所じやない。ナ是りやサヽヽちやつ〳〵と逝。地とフシ紛らせば。地苦のない女郎中居共。詞是りや面白い泣さんに。一盃上て爽然と。妾等も泣たい。地サア〳〵一つと無理遣にフシ强る盃。何の其。地醉ていふ氣は弱いから呑ぬ先から氣違ひに。寧そ成てと胸を居。茶碗で二つ重ね呑。醉ぬ心を。醉になし。詞成程私しや。泣上戸じや〳〵。是が泣ずに居られふか。地母御樣や奥樣のお心を思ひ遣れば。悲しうて〳〵。

お二人に成代つてお迎に來た心。推量して御覽じませ。お前は何共ござりませぬか。わたしや胸が張裂るはいな。ハ、、、、。詞眞に强い泣さんで。氣疎う座が持るはいな。是りや　地呑るはと心なふ騷ぐ程猶。汲出す。涙。由良も聲こそ立ね共。胸に。堰來る恩愛を。醉に取成し。詞イヤ此奴は能々存分泣々。所望じや今少と泣て聞し。朝野さん。何ぞ其處へ哀なめり安彈ておくれ。哀れな事なら十三鐘。地胸の調子は合ぬ同士。詞コレ申し夜半が鳴と水の泡。お前の心一つで。生る死るの大事の瀨戸。お歸り成さるゝ心はないか。何でも殺すお心じやな。歌歸ろと泣ど。返らぬは。死出の山路に迷ひ子の。詞如何にも殺す〳〵。斯う盛掛つてからは。何程可愛ふても。殺さにや何も座敷が濟ぬ。酒呑の茶屋の座敷は戰場も同じ事。一寸も引れぬ場に成て。熱鐵のやうな酒を呑込。苦しみをナコリヤ確と答へる爰が辛抱。比興者と笑はれぬ樣に尋常に死ね。ハテ死ざ止まい我心。歌菩を散す。仇嵐。野邊の。草葉に置白露の。脆き命の。果敢なさよ。父は身も世も有れふ物か。お前が仰つしやらいでも。國を出るから腹切と。覺悟して居るお子じや物。何の未練がござりませふ。眞に〳〵其堅さ。私や死んでも强い侍じやと譽られるが嬉しい。口惜いは爺樣を比興者じやと笑ふた奴を。切殺して死たいと。地九つや十の子心に。齒ぎしみしての無念がり。詞夫程迄に親御の事。思ふ彼子を慘酷しい。助る事が叶はずば。お前のお手で介錯して。出來たと只た一言　地言て臨終さして給べ。能々深い譯ある事と。私しや思ふて居ますれど。我子の死るを見殺して。茶屋の座敷の其酒が。能ふマア咽へ通ります。何程武士でも胴欲な。少は母御や奥樣の。お氣にも成て御覽じませ。餘り苛い情ないと。酒に負せて恨の丈。言ても返らぬ命の繼目。助る筋はない事かと哱と計に泣聲を。フシ一度に呶と高笑ひ。コリヤ　詞刎ました。是から寧そ氣を更て踊りに仕ふじや有まいか。サア〳〵女中樣も踊いな。由良樣の三味線で。宜ろ〳〵。然らば爰で女中樣の泣踊は如何有ふ。是もして見よがしのへ。龍田川には紅葉を流す。醉た女中は涙を流す。下戸も上戸も藝子も仲居も手を揃へ。ソレ〳〵やつとさ。詞コレ如何じやいな。早めてせい。ソレ〳〵〳〵やつとさ。ソレ〳〵〳〵。

それ鐘が鳴。ハア、地心も亂れ手も狂ひ。今が我子の最期かと思へばさしもの由良之助。胸に燒鐵刺ごとく。見交す互の目も疎々。詞ア、醉た〳〵。地山にぞ フシ着けり。詞サア〳〵お二人ながら強い醉樣。水上ふか御寢なるかと。地夫とは心暫間も。地忠義忘れぬ大星力彌。息切戸口に入らんとせしが。待柴垣より音なふ小石。折こそ惡しと止る目先。見へもせぬ目を光らす座頭。詞由良樣〳〵。先刻の返事は如何じやいの。朝野を抱て寢さらぬのか。寢さそふ〳〵。仕たが御坊。此座敷に朝野が居るか。但しは居ぬか。ムヽイヤ慥に爰に居る。嗅がするはい。サア何邊に居るぞ指て見たり。夫が合ら直に抱て寢さすのぢや。サア皆ついと並だり。子買〳〵何子が望いぞ。一番の中の。此子が欲い。ハヽヽヽワイ夫りや床さんじやわいな。夫なら今度は端から二番目。夫も違ふた違ひ棚。此間に徐々外すが大事。狀受取た先へ〳〵。地先へ〳〵と力彌に知らせ。傍の人を。フシ散書。地お照が差出す釣燈籠。詞ヤア書置の事とは。お石樣のと。地言口卒度押ゆる由良。上には座頭がつゝぱりと。詞コリヤ如何じや。皆何方へ行居つたと。地柱にぐはつたり。詞ハテめんよふな。此方は緣先東は植籠。此間が玄關。筋かいに侍部屋。横に取て長屋水門。爰が物置此方が柴部屋。裏門は高塀。池を廻に取圍む。亭座敷こそ師直が。寢所の內と。地敵の案內。いち〳〵聞取。フシ由良之助。詞ホウ早野勘平が兄早野和助。稚顏見覺へ有。堅固て有たな。ハア御推量に違はず。弟は先達て切腹。責めて五體滿足ならば我成共敵討の御供と。思ひに甲斐なき其代。幼少よりの盲目を幸鎌倉に下り師直が屋敷へ入込お伽座頭。用心嚴しく女子供に至る迄。他所の者は一人も入ね共。盲の一德心を赦し。地奧へ通せば隈々隈々。目は叶はね共忠義の魂。詞足の歩數に何間何尺。地飛石の數迄も胸に覺へた館の案內。詞とは知らぬ佐平太の虛疎。由良殿の底意を探る供に連たは幸究竟。地お目に掛つて心底殘さず。申上る我本望と明りを走る フシ座頭が忠義。詞ノウ是々〳〵。母御樣やお石樣や。お前を見限り自害するとの此書置。國元を立候迄は苟と存じ候へ共。聞しに勝る身の放埒。比興者に愛想盡て。先立相果て申候。シテ表門の間數は。百四十間東の高塀西の裏手は長屋の塀か。

皆折廻して平長屋。地辰巳角には櫓有。詞只悲しきは吉次郎。御身の心一つにて。親子三人無益死致し候事。口惜く存ら〻。地玄關見付十二間。詞侍小屋は南か北か。三方に取廻し。馬屋は西に武具の藏。憂恥を見んよりも。冥途へ參つて殿樣に。御奉公申たさ。地夫より廣間遠侍。詞扨は此間長廊下。地寢所は。別に數寄屋立。泉水築山其外に逃て フシ隱るゝ。所もなし。詞恨の丈は未來にて。敵を討は夜討の手配。ハヽヽヽ　地大望成就時至る。得難き繪圖の出來するは御邊の手柄。兄と云。弟と云ひ。ケ程心を碎かるゝ。亡君も嘸御滿足。コハ勿體ない由良殿の。艱難辛苦に比ぶれば百分一の繪圖計。分相應の盲が忠義。夫を勵ます貞女の忠義。敵に惰弱を見せん爲め。躰を見殺す我心夫も忠臣。是れも忠臣。生るも。死るも君の爲め　地種々樣々の憂苦勞も。侍の常。世の習慣。是ぞ本望〳〵と泣ぬ表は武士の酒と涙に。袖浸す フシ茶屋の。軒端の村時雨。詞案内知るれば片時も早く。地出達の用意心急く早野 フシ然らばと立出づる。地庭に中居の班々と。詞是はお早い最お歸りか。イヤモ醉た〳〵何時であろ。丁度夜半。是りや又餘り。然らば法師も送りましよ。地因幡橋迄送らんと夕月影も。雨曇。お近い内には。今生の別れと。後に。三重へ知られける。地別れ道より逸散走り我家の内に駈入て。見るも妨嫌や佐五兵衞が。膝に掻乘吉次郎。疊に滴る血は紅。反古障子も隈取血煙。ノウ最愛やと泣お照。詞ヤア見苦しい。稚けれ共侍の。切腹の場に女は叶はぬ母人の介抱申せと迫立遣り。躰が小腕に手を持添。介錯は聞へたが。迚も切腹さすならば。何故再び生ぬ樣には介錯せぬ。但し所存有てかと。地星を指れてハツト計。詞御推量の通り。既に期とは存じたれ共。花の樣な若旦那。餘りおしさ勞しさ。急所を除て御介錯。主人への申譯は。佐五兵衞が此血汐と。地肌寬れば血は瀧津瀨。切も切たり フシ十文字。詞由良之助樣。御子息吉次郎樣の。御命の瀨戸に成ても。御心底を明されぬは。下郎めが魂を。御疑ひ成さるる。深き御賢慮でござりませふ。他言致さぬ潔白は。腸を掴出して誓紙の金打。吉次郎樣のお命は。何卒　地是でと跡得言はず。思ひ込だる忠臣に。感じ入たる由良之助。力彌參れと吉次郎が。腹に緊と絹引締。遁佐五兵衞。元御一

家の石堂殿。包隱すも今日限り。今日只今敵地の案內知れたれば。今宵直儀錢足すれば。敵の首を見る事も兩月は過すまじ。最早心底打明す。母人女房。誓紙の血判受取たり。對面候と云ふ聲に。地障子開れば母お石始の姿其儘に。夜討の裝束仕立際。お照も俱に フシ手利の縫針。地中にも母が勇聲。詞親が死でも子が死でも。大事を明さぬ其丈夫。左樣なくば大望は成就せまい。其方の母女房じや物。敵の首を取たと云。便を聞たら其處でこそ。夫迄は中々何の汪濶に犬死せふ。地障子に書れし樂書に。皷の大事は三つ地に有とは。敵を討を皷に寄せ。密事を口へ出すなと心の禁め。地血をあやしたは女ながら。神交の此血判。義臣の中の我々が。仕立た裝束。詞最ふ氣を置ずと早打たちやと差出す。地ハ、、、、親の心魂籠られし。奬噲が母の衣夜討の フシ門出忝し。コレ　詞吉次郎が手も淺し。心底明せば石堂殿へ大星が返事も立。薄手の血汐は汝が血判。助ける命は佐五兵衞が未來の手向。ハア有難や。夫聞て直に成佛。和子達者で。地せめて一人は忠臣の。お胤が殘つて フシ下されと。地今端の際迄主思ふ。他家の忠臣我迚も頓て冥途で對面せん。道は一筋三途の首途然らば〳〵〳〵の聲殘す。義臣の胤の稚子は今に命を壹岐の國。二代の大星手習の。忠義のいろは星兜夜半に紛れて。三重立かゆみ

第九

地世渡りは其 フシ時々の。筆遊。江の嶋の片邊織部彌次兵衞が假住居。岩田左內と名も變て武鑒指南に取交て。娘や母は裁縫業。細き手業も最ど猶。 フシ心閑しき師走空。地お才は傍片付て。お上掃出すちり〳〵日。日脚も足も忙然と。立歸る主彌次兵衞。聟の彌宗治打連て。 フシ急促として內へ入。地娘は見るより。詞ヲ、爺樣お歸りなされたかと。云聲聞て母も立出。詞ヲ、彌次兵衞殿聟殿も戻つてか。今力彌樣を始其外の若手の面々。裏口からお出なされた。ヲ、其筈〳〵。大勢は目立故裏道からも見へる筈。彌今夜一黨の面々打揃ふて首途の祝義。云付置た料理は能か。

アイ今朝から母樣と二人して拵へて置ました。ヲ、用意が能ばソレ彌惣治。其方は奥へ往て御酒萬端心を付。お膳の用意仕たが宜らふ。身共は爰で大星殿のお出を待。然らば左樣致しませふ。イヤ申し彌次兵衛殿。此方樣も時分で有ふが爰へ膳を持て來ふか。ヲ、サ日頃の用意今日に約り。萬事手つがひが能故に。ア、嬉しやと思ふからいつそ物を喰氣もない。例の好物酒にして。吸物の毒味致さふ。ヲ、夫も宜らふ。サア〳〵聟殿。地娘もお出と打連て。フシ母は勝手へ入にける。地跡に彌次兵衛一心不亂。心の手配取つ置つ。お才は手早く勝手口吸物銚子持出て。詞サア〳〵お上りなされませと。地指出せば機嫌能。盞を取て。詞ホウ斯じや〳〵。鴨に水菜は名鳥の吸物。お料理人出來ました。ハ、、、、。是りや〳〵娘毎時の樣に酌は入ぬ。奥の給仕が肝心。奥へ行きや〳〵。アイ〳〵夫なら御氣根にと。地娘は奥へフシ表の方。地どてら布子にかます袖大刀一腰指込で。案内もフシせず内に入。詞岩田左内殿とは爰かな。ム、此方の事かと地揚り口。泰然居る大フシ胡坐。詞ホ、終に見知らぬお若い人。何ぞ用事でござるかな。ア、用が有りやこそ來たはいの。吾りや此江の嶋で口を聞。三嶋の雲八と云男。聞きや貴方は劔術の指南さんすげな。面倒ながら少相人に成つて下んせと。地なめた詞の邪株。地一物有と見て取織部。詞ハテ是は迷惑。指南の何のと嵩高な事ではないが。マ今は甚う取込だ事が有ば。明日でもお出に預らふと。地云を打消し。詞コレ〳〵〳〵劔術の師匠樣。先生樣。何程取込だ事が有ふ共。相人に成ふと望まれて跡へ寄て濟かいの。拔言云ずと誤る氣なら。奇麗に吾が弟子に成んせ。揉込で遣ふわいと。地悪口悪體向ふ見ず。地彌次兵衛は居直つて。詞成程其元のが皆御尤。拙者劔術指南と申すも町人の素人を集め。實は渡世が仕度計。其元方の相人に成樣な。骨の有親仁ではござらぬ。渡世の邪魔に成事なれば御他言は必御無用。御了簡下されと。地斷り云へば吹出し。ハ、、、、詞扨も脆い物賀じや。夫なら何にも覺へはなけれど。鼻の下が養ひ度計じやのと。地膳を立蹴に蹴返す雲八。堪忍ならず聟彌惣治一挫と フシ飛掛れば。地彌次兵衛隔て。詞ヤイ〳〵〳〵是りや其處な疎忽者。吾さへ相手に得成ぬ彼人。其方達が及ぶ物か。ヲ、何を親父

樣。コリヤ〳〵未だ馬鹿者。イヤ必氣に支られな。何事も此左内が誤ります。ム、然したら慥と誤るな。左樣て有ち〳〵。此後師匠顔せまいぞ。此度は赦して遣ると。地何を夕暮傍を見遣り。心殘して フシ立歸る。彌惣治跡に蹉突掛。詞親父樣。お居りなされた膳部迄。脚に掛たアノ蚊蜻蛉め。安穩でお歸しなさるは。ハ、、、、勇氣計で若い〳〵。アノ毛二歳め一摑に摑み殺すは易けれど。彼奴は鷺坂伴内迚。師直が家來なりしが。近來機嫌を損なふて扶持放れの浪人者。何がな云立に歸參せふと。我家を窺ふ曲者と。見付た故今の體裁今宵大望の門出なれば小事には目も掛ぬ。サア奥に用が有ふ。地早ふ〳〵に彌惣治は。フシ一間へ這入門の口。地兼て約せし刻限も今ぞ大星由良之助。原郷右衞門打連立 フシ密々と入來れば。地彌次兵衞目早く出向ひ。詞先程より相待兼ました。イザ先づ彼方へと。地挨拶に互の禮義悠々と。 フシ上座へこそは押直り。地由良之助威義を正し。詞先以て今日は御苦勞千萬。先刻申合せし通り。神崎彌五郎竹森喜多八。兩家の人數は子の刻に打立手筈。我々は若手を引連此所より立越る。萬端貴殿の御心遣ひ。地忝なしと一禮に。郷右衞門詞を改め。詞時至て今晩夜討と決定。御互に滿悦致す。サレバ〳〵。我等七十餘に及んで無念の月日を送りしに。今日如何成吉日ぞと。聟諸共大慶致すと。地悦び フシ取々成所へ。妻は心得勝手口。地三方に熨斗昆布。檔姿徐々と。跡に附添娘のお才。母の玉木は手をつかへ。詞年來の御願望今宵首尾能相調ひ御滿足に思召れん。地先御座附の御祝儀と三方を差寄れば。由良之助居直つて。詞お互に大悦至極。殊に心利の此御祝儀忝なしと押戴き。未定刻に程もあれば御亭主にも休息有。身共は奥に力彌にも示合す事有と。地挨拶都度〳〵郷右衞門。フシ打連一間へ入にける。地跡に彌次兵衞打寛ぎ。詞今大星殿云るゝ通り刻限も未程有。娘其枕を來せ。婆ちと腰でも打て給もと。地轉然と臥る氣散じさ。物に屈せぬ生れ性。フシ寢より早く高鼾。地娘は母の傍へ寄。詞コレ申し母樣お呵り成ろふか知ね共。地親夫に一生の別れ。私しや悲しうござんすと。目に一杯の涙聲。聞と堰來る胸の中確と。フシ忍へて。詞コレ夫は何云のじや。此中からも言聞す。武士の妻子は爰の事。埒もない事言出して

母まで後れを取すのか。アレ〳〵奥には皆歴々が來てござると。地恥しめられて何のマア。詞遂申したのでござります。ドレ爺様の腰擦ろと。地紛らす心も母親の。呵る心も涙川。フシ落ては同じ哀なり。地早出立と大星力彌郷右衛門。フシ彌惣治諸共立出れば。地母は心得コレ〳〵娘。詞皆お立成るゝ彌次兵衛殿を起しましや地アイとお才が立寄を。郷右衛門押止。詞是より江の嶋土橋に集り。人揃へする間も有ば。御老人の心休め。ハ、大望抱へて心氣勤ぜず心地能き高鼾。今に始めぬ彌次兵衛の大丈夫。ハ、逓の英雄矢張其儘〳〵。ハ、郷右衛門殿の仰なれば舅には跡より御出。併女房。由良之助殿にも若手の面々殘らず引連。裏道より只今御立。程能ふ跡より起しませい。地イザ御供と立か弓。引は返さぬ夫の顔眺めた計別れ際。挨拶取々三人は。勇進んでフシ出て行。地跡見送つて娘のお才。迫來る涙禁兼。わつと計に取亂し。再び逢れぬ夫の別れ。然らば共名殘とも。一言云ぬ心の愁氣推量して下さりませ。詞ヲ、道理じや〳〵尤じやわいの。ソリヤ此母も同じ事。夫や親に別るゝのじや物。悲しうなふて何とせふぞいの。コレ〳〵寢て居やしやるが幸じや。又と見られぬ爺御の顔。暇乞に能見て置や。アイ〳〵お前も。其方もと。地互に袖を口に當流るゝ涙音なしの瀧に。フシ浪打計なり二人は潑と心付。詞イヤ〳〵隙取ては一大事。コレ彌次兵衛殿〳〵。とゝ様申し。皆先へお立なされた。目をお覺しなされませと。地搖り起せば起上り。ナニ各々は早立れしか是はしたり。サア〳〵裝束持て來い。地早ふ〳〵と氣も急迫。出立の裝束こつて〳〵。フシ親子が傳手に。着せ換る。フシ仕立際能其骨柄。地長押に掛し鎗追取。上段下段に手練の心身。くつと突込緣の下。忍び込たる以前の伴内。肩先突れて無二無三。切込刀に鎗の長柄一尺計切折たり。彌次兵衛透さず飛交し。詞今宵の戰ひ宅中なれば。柄の短いが此方の勝手。地胴腹に覺へよと貫く鎗に伴内は。フシ迂倒廻つて死でけり。詞ホ、軍神へ手向の手始。潔し彌次兵衛殿。地と思掛なき由良之助。一間を出れば皆悔り。詞ホ、怪しまれな織部殿。最前より貴殿の睡眠合點行じと思ふより。打立たる體に見せ一人殘りし此大星。曲者を仕留られしは逓の働きなり。夫に續て今宵の手筈。兼て

件の繪圖を以て諜合せ置たれど。臨機應變計難し。人數を二手に分備へ。東は搦手二十四人。西は追手二十三人。力彌に貴殿鄉右衞門諸士の指圖を爲らるべし。ホ、御安堵有れ大星殿。元來貴殿に習ひ得し。夜討のかけ引法を亂さず表門より馳入て。鹽冶が舊臣仇を報ずと呼はり〳〵。師直が癡所を目掛て切入べし。地ヲ、其時四方へ逃散者。詞女童を追ふべからず。目刺敵は師直一人。四十餘人の合印敵に勝色いろはの文字。山と問なば。川と答る合詞。同士討の氣遣なし。味方を集る相圖は笛。ホ、〳〵〳〵美くも覺へし。彌次兵衞殿我方寸の計略に符を合せたる貴殿の心得。ホ、其健氣さに續いては。地御內方と云ひ。息女の心嘸と推量仕ると。言れて猶も悲しさを。笑顏作つて フシ勇立。地織部續〳〵小踊し。心地能〳〵。本望遂るは目下。大星殿いざ發足。婆娘隨分と長生せい。地然らばと鎗を打擔げ勇み。進んで。三重へ出て行

第十

地大星が軍慮の如く四十餘人は塀を越。門を碎いて東西より實入ば。寢耳へ夜討周章驚き逃行下部。中にも敵對ふ者あれば。矢間神崎竹森寺岡。原鄉右衞門徒黨の面々秘術を盡し切立れば。双向ふ者も嵐に連降來る雪の フシ烈しき戰。地織部は 漸〳〵後れ馳戰ふ中へ馳來り。玄關間近く駈行處へ。敵の中にも名を得たる岩淵丹藏刀 携へ踊り出。詞ヤア素浪人の及ばぬ腕立。刀に係り成佛せよと振廻して支れば。ハテ御氣丈なる御行跡。見らるゝ通りの此老躰。しばらくさくと一口參れと。地云も敢ず鎗打振て突掛れば。さしつたりと打拂ひ。兩方劣らぬ手利の早業卷流しつ結び合。織部は次第に跡すさり。丹藏附込附廻せば。彌次兵衞苛て突鑓に。脇腹充分 フシ苦しむ折柄。地夫と見るより鄉右衞門。詞織部殿如何に〳〵氣遣あるな鄉右衞門殿。仕課たりと鑓引拔。地止をぐつと流石の老人。莞と笑ふて兩人は。爲奧深くぞ。三重へ進み入。地徒黨の人々爰かしこ職ふ中に大星力彌。佐平太に渡り合追駈來り大音上。詞ヤア

ヤア佐平太。亡君の仇儕等親子が首を取 地覺悟せよと フシ呼はれば。 詞ヤア憎くき過言此世の暇と切て掛る。 地心得力彌が受留て。拂へば切込左平太が。肩先切れてたぢ〳〵。 疊掛て討所を。 藥師寺は飛て出そふは爲せぬと支る間に左平太は命辛々 フシ逃て行。 詞ヤ言れぬ所へ出しや張て敵の片身取逃した今宵の茶の。湯命の薄茶觀念せい。ヲヽ殊勝う吐たり。汝が命も霰釜。サア來い濃茶と渡り合。 地互に手練の上段下段。更に勝負も付さる所へ。寺岡はかけや引提走寄。ヱヽ面倒なと胴骨を撞と胴突打倒せば。 體は微塵に フシ死てげり。 地由良之助に引添て皆々駈付。 詞師直は寢所に見へず。殿中隈々搜せ共。行方知れず。物臭きは此柴部屋と。 地云より喜多八柴の透。 究込鑓に堪兼。柴炭俵を投付〳〵。 踊出たる高の師直。大星聲掛。 詞我々亡君の仇を報ずる今日只今。サア尋常に覺悟有れ。ヤア奇怪な雜言。師直が死物狂と。 地傍なる刀追取て。討て掛るを大星が。透さず押へて首討落し。各立寄年月の。恨の双思ひ知れと寸計〳〵に切付〳〵。 踊上り飛上り悦び フシ涙ぞ道理なり。 地大星頓て師直が。袖切取て首を緊と押包。 詞亡君の御墓へ手向ん。イザ 地打立と勇將猛將。揃も揃ふ忠臣義士。武士の鑑と末の世に其名も。高く傳へけり。

明和第九壬辰歳四月廿八日

作者連名

近松半二
松田ばく
寺田兵藏
榮善平
竹本三郎兵衛

躾方武士鑑終